

平成21年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学FD委員会

はじめに

—要請される教育力を謙虚に受け止めよう—

昨年度の本報告書で、本学のFD活動は新たな段階を迎える、と記しました。

その主たる理由は、いうまでもなく、大学教育をめぐる環境の変化と、それに呼応するかたちで大学教育が果たすべき新しい課題が生まれ、大学教員はそれに応えなければいけないからです。

学士課程教育という考え方も、上に述べた環境の変化と新たな課題への対応とみることができます。教員サイドにとって、学士課程教育の要は、「教授主義から修得主義への転換」にあります。すなわち、学生が修得すべき学習成果を明確化することにより、「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」に力点を置いた教育を求められているわけです。

しかし、「教授から修得へ」という「目標到達型教育」は、これまで大学で実践されてきた伝統的な教員主体の講義や授業のやり方になじんでいる大学教員にとっては、パラダイムシフトともいうべき転換です。とはいえ、英国の高等教育では、すでに、教職員間でひとつのコンセンサスが形成されています。それは、大学教員が取得した学位は、「専門のサブジェクト」に対して与えられたもので、「そのサブジェクトを教えること」に対して与えられたものではないという考え方であり、高等教育における教育のあり方を考えるさいの、前提になっています。

これから求められる大学での教育力を、わたしたちは、まずは謙虚に受け止めることが必要です。高等教育機関は新たな文脈におかれていること、あるいは、学士課程教育という考え方を無視して本学の教育もあり得ないのだという前提にたつて、それが要請する従来とは異なる教育力を実践できるようにならなければなりません。その意味で、昨年度、3月に、「学生を評価する—学生の何をどう評価するか」というFDワークショップが開催された意味は大きいといえます。

最後に一つ提案があります。本学のFD活動は多種多様に活発に実践されていますが、個々の教員が日ごろの授業での一般的な悩みや、授業を深く理解するための前提となる学力あるいは、履修学生の授業理解度をうまく把握できない等々などに関して、学部横断的に教員間で意見交換し、解決の意図口の把握の仕方をみつけられるような場を提供することも、本学として大事なFD活動の一環ではないかと思えます。

平成22年度から、機関調査(IR)の手法を用いて、本学の教育活動の質保証の枠組みづくりが始まります。その結果をうけるかたちでのFD活動もこれからは実践していく必要があります。

大学FD委員会委員長

教学部長事務取扱 島川 聖一郎

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画及び課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	3
(6) 今後に向けて	4
2. 学部の活動.....	6

II 教員研修

1. プレゼンテーション研修会	
(1) 実施の概要	24
(2) 研修プログラム内容	24
(3) 実施の状況	25
(4) 実施後のアンケートから	25
(5) ディスカッションの実施	29
(6) 実施の成果	36
(7) 今後の課題.....	36
(8) 21 年度プレゼンテーション研修会参加者一覧	37
2. 新任教員研修会	
(1) 研修プログラム内容	38
(2) 実施の成果	40
3. Blackboard@Tamagawa の活用	
(1) 活用事例報告	42

III コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要	50
2. 集計結果及び公表	50

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事要旨	65
2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙	71
3. 「コア科目授業評価アンケート」用紙	72
4. 玉川大学 FD 委員会規程.....	73

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長事務取扱	島川聖一郎
副委員長	学士課程教育センター	大藤正
副委員長	学士課程教育センター	菊池重雄
委員	文学部	平高典子
委員	農学部	関川清広
委員	工学部	小倉研治
委員	経営学部	小林幸夫
委員	教育学部	金井茂夫
委員	芸術学部	林三雄
委員	リベラルアーツ学部	小嶋正敏
委員	学術研究所	切田節子
事務担当	教学部教務課	茂村恭司
事務担当	教育企画部教育企画課	大野太郎
事務担当	学士課程教育センター	山崎千鶴
事務担当	人事部研修センター	柳原達宏

(3) 今年度の活動計画及び課題（平成 20 年度報告書「今後に向けて」より再掲）

- ・大学 FD 研修会の開催を図る。
- ・新任教員研修会を継続実施する。
- ・プレゼンテーション研修会および新規研修会等の開催を図る。
- ・教員相互の授業参観及び研究会の開催を推進する。

(4) 活動状況

主な活動内容としては以下のとおりである。科目担当者研修会については、昨年度まではコア・FYE教育センターが主催となりコア科目担当者研修会および「一年次セミナー」担当者研修会として実施していたが、今年度よりコア・FYE教育センターが学士課程教育センターに改組され、さらに大学FD委員会の事務主管となったことから、「一年次セミナー」やコア科目に限らず、大学開講科目を担当している教員全員を対象として開催した。内容としては、「授業デザイン—シラバスの作成」、「成績評価方法を考える（レポート）」、「授業計画書の作成」、「アクティブ・ラーニングの指導法」、「学生中心授業の確立—協同学習の可能性」、「学生を評価する—学生の何をどう評価するか」といった、昨今の大学が迫られている教育の変化への対応に資するものを設定した。

また、プレゼンテーション研修会や新任教員研修会も例年と同様に開催した。プレゼンテーション研修会は今年度も3回開催し、合計16名（初年度からの延べ受講者数は239名、平成21年5月1日時点の在職者で受講した累積数は201名、全専任教員の77.0%）の教員が参加した。新任者研修会については平成22年度新任教員を対象に2日間の日程で行ったが、プログラムは、国立教育政策研究所の「FDプログラムの構築支援とFDerの能力開発に関する研究」により開発された「新任教員FDのための基準枠組」を基に、昨年度より若干の変更を行った。

上記のほか、コア科目の「学生による授業評価アンケート」は例年どおり、春・秋学期それぞれに科目群を限って実施した。また、FD活動の情報収集を目的に、他大学等主催の研修会等に教職員を派遣した。

なお、大学FD委員会は3回開催した。参考資料として、巻末に議事要旨を掲載している。

<平成21年度>

5月16日	全国私立大学FD連携フォーラム 教員派遣
5月23・24日	日本高等教育学会年次大会 教員派遣
5月26日	第1回大学FD委員会 開催
6月5～7日	THE TEACHING PROFESSOR CONFERENCE（アメリカ ワシントンD.C.） 教員派遣
6月6・7日	大学教育学会年次大会 教員派遣
6月16日	ベネッセ大学支援フォーラム 教員派遣
6月23日	国立教育政策研究所FD公開セミナー「FD実質化のための提案」 教職員派遣
7月20～23日	初年次教育国際会議（カナダ モントリオール） 教職員派遣
7月20～24日	コア科目の「学生による授業評価アンケート」 実施（春学期）
7月25日	国立教育政策研究所特別シンポジウム「—大学教育への問いとその将来を考える—質保証の全体像を探る」 教職員派遣
8月4・5日	第1回プレゼンテーション研修会 開催
8月8日	教育改革FD/IT理事長・学長等会議 教員派遣

9月17・18日	第2回プレゼンテーション研修会 開催
9月19・20日	初年次教育学会年次大会 教職員派遣
10月27日	科目担当者研修会 開催
・11月18日	ワークショップ「授業デザイン—シラバスの作成」
11月6～8日	NATIONAL CONFERENCE ON STUDENTS IN TRANSITION (アメリカ ソルトレイクシティ) 教員派遣
11月23日	日本学術会議公開シンポジウム「教育の分野別質保証に向けて」 教員派遣
11月28・29日	大学教育学会課題研究集会 教員派遣
12月1日	科目担当者研修会 開催
	ワークショップ「成績評価方法を考える (レポート)」
12月13日	京都 FD 開発推進センター 大学 FD セミナー「大学間連携を活 かした FD・SD」 職員派遣
1月5・7日	お茶の水女子大学 国際規格 FD 事業ワークショップ 職員派遣
1月13日	科目担当者研修会 開催
	ワークショップ「授業計画書の作成」
1月15日	第2回大学 FD 委員会 開催
2月12～16日	ANNUAL CONFERENCE ON THE FIRST-YEAR EXPERIENCE (アメリカ デンバー) 教員派遣
2月17・18日	第3回プレゼンテーション研修会 開催
2月19日	東京大学国際シンポジウム「教育から学びへ：大学教育改革の国 際的潮流」 職員派遣
2月24日	科目担当者研修会 開催
	ワークショップ「アクティブ・ラーニングの指導法」
3月3・4日	平成22年度新任教員研修会 開催
3月6・7日	大学コンソーシアム京都 第15回 FD フォーラム 教職員派遣
3月16日	科目担当者研修会 開催
	ワークショップ「学生中心授業の確立—協同学習の可能性」
3月18・19日	京都大学高等教育開発推進センター 第16回大学教育研究フ ォーラム 教員派遣
3月26日	平成22年度 「一年次セミナー」新規担当者研修会 科目担当者研修会 開催
	ワークショップ「学生を評価する—学生の何をどう評価するか」

(5) 活動の成果

科目担当者研修会については、講演会のような受動的な取り組みではなく、ワークショップの形態で実施することで、教員各自の能動的な取り組みを目指した。また、同内容のワークショップを複数回開催することで、教員により多い受講機会を提供できたと同時に、少人数で開講することも可能になった。その結果、受講した教員から積極性を引き出すことができ、より高い成果を上げることができた。このことは受講後のアンケート（自由記

述)からも確認できる。また、内容については、シラバス、成績評価、授業計画書、アクティブ・ラーニング、協同学習などを取り上げた。これらはいずれも、平成 20 年 12 月に出された中教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において今後の大学が取り組むべきこととしてあげられているものであり、ワークショップとして取り上げることで、その必要性を教員に示すことにもなった。また、科目担当者研修会においては、大学開講科目を担当している非常勤講師も、全員を対象とした。他大学の事例を確認するとこうした研修会等では非常勤講師を対象外とするところも多く見られるが、本学ではこれまでのコア科目担当者研修会も同様、授業で学生と接するにおいては専任・非常勤の差はなく、学生にとっては等しく「担当の先生」であることから、本学の科目担当者研修会においては非常勤講師も受講対象とした。その結果、受講者の多様性が広がると同時に、非常勤講師の教育力向上にも貢献することができた。

プレゼンテーション研修会では、実施後のアンケートで多くの受講者がその有用性を高く評価していることが分かった。しかしながら、それはプレゼンテーション技術向上のために有用だということではなく、受講したことによって「気付くことができた」という点での評価だとみられる。こうした意識としての向上は技術面での向上よりも普遍性が高く、ただ受講した結果以上の成果があったと考えられる。

新任教員研修会については、国立教育政策研究所の研究成果を受けて内容を若干変更したが、その結果、研修目的がより明確になり、具体的な到達目標を立てることができた。

これら 3 種の研修会等には副次的成果をみることもできた。研修会等終了後にはアンケートを行っているが、そのいずれでも、違ったテーマの研修会、より高次の研修会を希望する声があった。今後の展開に向けての参考になると同時に、教員も積極的に新しい取り組みに変わろうとしていることがわかった。また、平素関わることのない他学部の教員とコミュニケーションを取ることができ、情報交換を図ることができたことを評価する受講者も多かった。

コア科目の「学生による授業評価アンケート」では、学生の直接の声を確認することができた。結果は本人にのみフィードバックされており、翌学期の授業改善に役立っている。なお、例年通り、全体及び分野集計の平均値を、学内のみを対象にホームページで公表している。

また、他大学等で開催されるセミナーや研修会に参加することで、他大学の取り組みについての情報収集を図り、その内容を学内で報告することが、情報の共有につながった。

(6) 今後に向けて

本学では比較的早期から F D 活動に取り組んでおり、次年度にはその多くが改善の時期をむかえると考えている。科目担当者研修会については今年度の内容を引き続き実施すると同時に、複数の新しい研修会等を開催したい。また、通常の教育活動上のさまざまな問題を探し出し、それを解決するための研修会等も考えていく。例えば、Blackboard システムを利用した補講の仕方なども、ワークショップとして計画したい。

また、プレゼンテーション研修会については、全専任教員受講という当初の目標はほぼ達したと考えている。したがって、今後は当該年度の新任教員を対象に、年間 2 回程度開催することとする。さらに、プレゼンテーション研修会受講後のフォローアップ的な研修

も考えていきたい。

コア科目の「学生による授業評価アンケート」については改訂を予定している。アンケート導入から6年を経て、大学教育、授業の方向性も変わってきている。つまり、これまでの大学では講義による教員を中心とした授業が行われてきたが、今後はアクティブ・ラーニングなどの学生を中心とした授業が必須とされ、それに伴い、授業評価アンケートもその変化に対応していく必要がある。そのことから、次年度からの実施を目標に、アンケート内容の改訂のみならず、集計・分析についても改善していく予定である。

3. 学部の活動

平成 21 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価の実施			学部 研修会	プレゼンテーション 研修会への 参加者数
			実施時期	専任 対象	公表		
文学部	7 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)*1	学外 実施	5 名
農学部	6 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web 予定)	学内 実施	3 名
工学部	5 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)*2	学外 実施	1 名
経営学部	3 名	5 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学内 実施	1 名
教育学部	10 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学内 実施	3 名
芸術学部	5 名	12 回	秋セメ終了後	全員 *3	—	学内 実施	1 名
リベラルアーツ 学部	5 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学外 実施	2 名
コア科目			春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内 (報告書)		

*1:文学部における学生による授業評価結果公表の実施は、比較文化学科である。

*2:学外には総括した内容、学内には全てを詳細に Web と紙面で公表している。

*3:受講者 30 名以上の講義科目を対象とした。

各学部専任教員におけるプレゼンテーション研修会の受講修了状況（平成 21 年度現在）

	21 年度専任教員数 (A)	A の中で受講した人数	割合
文学部	35 名	27 名	77.1%
農学部	47 名	36 名	76.6%
工学部	47 名	33 名	70.2%
経営学部	28 名	24 名	85.7%
教育学部	43 名	32 名	74.4%
芸術学部	38 名	28 名	73.7%
リベラルアーツ学部	23 名	21 名	91.3%
合計	261 名	201 名	77.0%

※専任教員は助手以上で、平成 21 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

■各学部における今後（平成 22 年度～）の計画等について、一覧にまとめる。

	今後の計画
文学部	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的にはこれまでと同様の枠組みで FD 活動を続ける。(人間学科・比較文化学科) ・今後、学内の FD 活動の機会をより多く設けるとともに、学外で開催される各種 FD 研修会への積極的な参加を促したい。そして、大学を取り巻く現状を的確に把握した上で、今後の文学部における教育・研究活動を再検討し、かつ、教員個々人の職能成長に努めたい。(文学部全体)
農学部	<ul style="list-style-type: none"> ・新カリキュラムにおける授業評価アンケートの実施（継続） ・これまでの授業評価アンケートの集計結果の分析、授業への還元方法の検討 ・授業評価アンケート項目および実施科目（実験・実習・演習科目等）の検討 ・IT システム（UNIVERSAL PASSPORT と Blackboard）の有効活用の検討 ・平成 22 年度プレゼンテーション研修会への参加者 ・基礎学力不足の学生に対する対応 ・大学院 FD 委員会との協調 ・今後予想されるカリキュラム改訂や社会からのニーズとの整合性を検討
工学部	<p>「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。マネジメントシステム学科・ソフトウェアサイエンス学科の 2 学科は IS09001 活動を通じて教育活動の PDCA サイクルによる改善を継続する。一方、IS09001 活動を平成 20 年度末で打ち切った機械情報システム学科ではこれまでの IS09001 活動における経験を活かして、当学科により適した方法で教育活動の PDCA サイクルによる改善活動を今後も維持する。授業参観（研究授業）を含め学部全体としての FD 活動については検討課題となっている。</p>
経営学部	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容・方法に関する研究（継続）。 ・教員研修会の開催（継続）。 ・専門科目共同授業に関する研究（継続）。 ・リメディアル教育に関する研究（継続）。 ・一年次教育に関する研究（継続）。 ・学生確保に関する研究（継続）。 ・学部・大学院一貫教育についての研究。 ・FD に関する組織的な対応、取組の強化に関する検討。

<p style="text-align: center;">教育学部</p>	<p>本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える学部の形成を進めるために一層のFD活動を推進する。具体的には、講義科目の授業評価アンケートだけではなく演習、実習、実技科目についてのアンケート用紙を作成し実施すること、そして、22年度はマークシート型のアンケート実施し、その結果を集計し学部内そして学生への還元が課題でもある。</p>
<p style="text-align: center;">芸術学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・GPA 向上、附加能力向上とともに、社会貢献の機会と場の獲得のための重要課題の一つである就職と、どのように取り組むかを教員、学生双方に認識させていく方途を考えなければならない。特に今の社会情勢から想して3年次早期からのプログラムを検討する必要がある。3年次においてキャリア教育の科目化を計画中である。また、学部パンフレットにおいて1年次からのキャリア支援プログラムを明らかにした。 ・様々な試みの継続と発展を心掛けていく必要があるが、その整理も必要と考えられる。例えば難しい面があるが、教員の業務の偏りをできるだけ減らし、各教員のモチベーションの向上を図る必要もあろう。 ・いろいろな外部発表に関連する科目等において、研究成果のまとめや報告書などの整備が必要と考えられる。
<p style="text-align: center;">リベラルアーツ学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでと同様、FDへの意識をより高めるとともに、インターアクティブな相互研修を基盤とするFD活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図っていききたい。 ・学部運営の「PDCA サイクル」の中にFD活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に活かしていく仕組みを構築していく必要がある。 ・中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を踏まえ、リベラルアーツ学部における「学士力」とは何かについて検討し、それを本学部完成年度（2010年度）以降の新カリキュラム作成に反映させることが今後の課題となる。

§ 文学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

現在、大学を取り巻く環境の大きな変化に伴い、価値観も多様化し、大学へのニーズも多岐にわたるようになった。一方、未曾有の不況の影響を受け、学生は、将来の予測が非常に難しい、不安定な状況におかれている。かかる現状の認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が、文学部および各学科独自の理念や教育目標をいかに実現するかという視点を常に念頭に置きながら職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に活動に参加できるような体制を構築することを目標にしている。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

文学部長、文学部教務主任、学生主任、および、文学部各学科主任（人間学科、国際言語文化学科・比較文化学科）を交え、各学科合同の FD 委員会を開催している。また各学科では、学科会あるいは運営委員会等の場で定例的に FD 活動の企画・運営に関する事項を審議している。

(3) 21 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

学生による授業評価の実施、学外研修への参加など、それぞれの活動で成果をあげることができた。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

人間学科では、各科目の授業形態（講義中心・発表中心・討論中心）・受講者の人数（クラスの規模）・マルチメディアの活用の仕方（Blackboard の活用：教材・宿題・課題呈示などを含む）に応じて、各教員が授業内容に関する確認テスト、授業のまとめの提出、コメント用紙の提出などの様々な方法により創意工夫を行いつつ、学生の授業に対する理解度、参加度、習熟度、感想、要望等を逐次確認している。これらの学習状況の把握を通して、学生の授業に対する評価を知り、それに対するフィードバックを行っている。

比較文化学科では、今年度は教職科目、比較文化セミナー以外の全学科開講科目を対象とし、学期末に授業評価アンケートを行った。アンケート結果は個別に各担当教員にフィードバックし、授業改善に資すると共に、学科運営委員会で全体の集計分析を行い、本学ホームページに掲載する予定である。アンケート結果は主任がすべてに目を通し実情を把握すると同時に、学科運営委員会で全体的な傾向を検討し、積極的な活用を試みた。また、比較文化セミナーⅢ・Ⅳが今年度から開講されたため、比較文化学科 3・4 年生を対象に、3・4 年次のいわゆるゼミについて、年度末に Blackboard 上で任意のアンケート調査を行い、学科運営委員会で両者の結果を比較検討して、今後の比較文化セミナー運用の参考とした。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

文学部では、教員相互の授業参観は行っていない。しかし、学科・学年指定のいくつかの必修科目を複数の教員が担当する中で相互の授業活動を客観的に捉えることを主体的に行っている。具体的には、複数の教員が必修科目を担当することで各学生の学習状況を多面的に把握するとともに、教員の授業への取り組みについては授業中の具体的な場面を例に挙げて意見交換を行い、教員それぞれが効果的な教授方法や学習指導を積極的に取り入れるなどである。また、授業の開始前には担当教員相互の話し合いを持ち、教材や授業の進め方に関する共通理解をはかり、授業終了後には、授業の評価基準も担当教員間で検討している。このような活動は、授業内容の客観性・透明性を高め、教員相互の授業参観の組織的な取り組みにもつながっていると考えられる。

④ 研修活動の組織的な取り組み

プレゼンテーション研修会には文学部から5名が参加した。

人間学科では、同志社大学で行われた「第15回FDフォーラム」(大学コンソーシアム京都主催、3月6-7日)に2名、京都大学で行われた「大学教育研究フォーラム」(京都大学高等教育研究開発推進センター主催、3月18-19日)に3名、比較文化学科では、「第15回FDフォーラム」に4名が参加した。

⑤ その他の取り組み

9・10月には主任会研修にFD委員が参加する形で、文学部の授業の改善・活性化を目的とした授業研究報告書の作成について実際の作業をおこない、1月に、文学部の授業の現状や目標を紹介した『今「文学部の授業」が面白い』を刊行した。

(4) 今後の予定や課題

人間学科・比較文化学科ともに、基本的にはこれまでと同様の枠組みでFD活動を続ける。

文学部全体としては今後、学内のFD活動の機会をより多く設けるとともに、学外で開催される各種FD研修会への積極的な参加を促したい。そして、大学を取り巻く現状を的確に把握した上で、今後の文学部における教育・研究活動を再検討し、かつ、教員個々人の職能成長に努めたい。

S 農学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

全学 FD 委員会と協調しながら、プレゼンテーション研修会を始めとする各種研修に積極的に参加する。また、専任教員および非常勤講師は原則学生による授業評価を行う。学部内では、(2)の組織メンバーを中心に専任教員との情報交換に努める。これらを通じて、教員の教育技能向上に対する意識をさらに高め、技能開発を推進する。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

主任会メンバー、すなわち農学部長（東岸）、生物資源学科主任（小野）、生物環境システム学科主任代理（杉本）、生命化学科主任（堀）、学生主任代理（水野）、および教務主任代理・大学 FD 委員（関川兼務）の計 6 名が中心となり、これに当たる。

(3) 平成 21 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

- ・農学部科目（学生要覧における各学科課程表上の科目）について、授業評価を春・秋の各学期末に実施した（計 2 回）。4 単位科目（平成 20 年度以前入学生対象）については複数の教員が担当している関係上、担当者別に授業評価を実施した。平成 21 年度からの新カリキュラム科目については、読み替え対象となる旧カリキュラム科目とともに授業評価を実施した。
- ・専任教員（新任教員を含む）のプレゼンテーション研修会への参加。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

- ・農学部長と FD 委員の協議に基づいて、農学部科目担当の全教員（専任教員および非常勤講師）に協力を求め、春semester69 科目（延べ）、秋semester53 科目（延べ）、授業評価アンケートを実施した。ただし実験・実習科目、演習科目、また受講者が 10 名以下の科目については除外した。
- ・平成 21 年度を含め、過去 5 年間の授業評価アンケート結果を纏めて Web 上で公開すべく、準備中である（参考：次ページの表）。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

平成 21 年度においても教員相互の授業参観は実行出来ていないが、教員間の各種情報交換は活発になりつつある。授業内容・方法の工夫等を共有するために、今後教員相互の授業参観をはじめとし、情報交換の場を体系化する必要がある。

④ 研修活動の組織的な取り組み

平成 21 年度には、3 名の教員（うち 2 名が新任教員）がプレゼンテーション研修会に参加した。未参加の教員は 1 名を残すのみとなった。

⑤ その他の取り組み

- ・平成 20 年度に 3 学科体制が完成したことを受けてカリキュラム改訂を行い、新カリキュラムとして平成 21 年度入学生を迎えることができた。主な改訂は 4 単

位科目の2単位化、それに伴う科目名の変更とシラバスの検討などである。このため、平成20年度に比べ、授業評価アンケートを実施した科目数(延べ)が増加した。

- ・学生の履修登録、シラバス・履修登録者名簿・成績の管理などのシステムが一新したことに伴い(UNIVERSAL PASSPORT)、単位認定の基礎となる新システムの有効活用に関して、下記の内容で学部研修会を実施した(9月10日)。適正なシラバス作成と授業の実施、履修登録者名簿と受講者の管理、授業環境の維持、提出物・試験の採点と成績評価、など
- ・平成22年度のシラバスについて、学科ごとに教務担当が確認作業を行った。

表. 平成21年度の授業評価アンケート集計結果(3学科のアンケート実施科目すべて)

学期	設問	強く そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	最頻値	
春 学 期	1 授業には意欲的に取り組んだ	0.224	0.414	0.296	0.050	0.016	ややそう思う	
	2 授業以外によく予習復習した	0.113	0.255	0.419	0.154	0.059	どちらとも言えない	
	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	0.290	0.398	0.237	0.052	0.022	ややそう思う	
	4 毎回よく授業の準備がされていた	0.359	0.366	0.216	0.041	0.018	ややそう思う	
	5 シラバスにそって授業が行われた	0.281	0.371	0.298	0.036	0.013	ややそう思う	
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	0.350	0.356	0.214	0.055	0.025	ややそう思う	
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	0.336	0.325	0.223	0.074	0.042	強くそう思う	
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	0.250	0.322	0.330	0.071	0.026	どちらとも言えない	
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	0.290	0.346	0.276	0.058	0.029	ややそう思う	
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	0.313	0.348	0.263	0.053	0.022	ややそう思う	
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	0.381	0.344	0.225	0.032	0.018	強くそう思う	
	12 授業全体についてよく理解できた	0.205	0.370	0.297	0.091	0.037	ややそう思う	
	13 授業の内容に興味をもてた	0.286	0.335	0.270	0.071	0.038	ややそう思う	
	16 この授業を受講してよかったと思う	0.328	0.334	0.257	0.047	0.033	ややそう思う	
	秋 学 期	1 授業には意欲的に取り組んだ	0.222	0.396	0.314	0.052	0.016	ややそう思う
		2 授業以外によく予習復習した	0.115	0.263	0.426	0.140	0.057	どちらとも言えない
3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた		0.314	0.393	0.246	0.034	0.013	ややそう思う	
4 毎回よく授業の準備がされていた		0.353	0.385	0.226	0.025	0.010	ややそう思う	
5 シラバスにそって授業が行われた		0.295	0.379	0.290	0.025	0.010	ややそう思う	
6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った		0.361	0.349	0.244	0.032	0.015	強くそう思う	
7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった		0.335	0.318	0.253	0.064	0.030	強くそう思う	
8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した		0.254	0.313	0.332	0.074	0.028	どちらとも言えない	
9 教員は良い学習環境を保つよう努力した		0.294	0.341	0.294	0.050	0.022	ややそう思う	
10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した		0.327	0.336	0.263	0.050	0.023	ややそう思う	
11 教員は毎回熱意をもって授業をした		0.374	0.332	0.252	0.029	0.013	強くそう思う	
12 授業全体についてよく理解できた		0.204	0.337	0.329	0.090	0.040	ややそう思う	
13 授業の内容に興味をもてた		0.282	0.322	0.285	0.066	0.045	ややそう思う	
16 この授業を受講してよかったと思う		0.315	0.320	0.277	0.056	0.032	ややそう思う	

(4) 今後の予定や課題

- ・新カリキュラムにおける授業評価アンケートの実施(継続)
- ・これまでの授業評価アンケートの集計結果の分析、授業への還元方法の検討
- ・授業評価アンケート項目および実施科目(実験・実習・演習科目等)の検討
- ・ITシステム(UNIVERSAL PASSPORTとBlackboard)の有効活用の検討
- ・平成22年度プレゼンテーション研修会への参加者
- ・基礎学力不足の学生に対する対応
- ・大学院FD委員会との協調
- ・今後予想されるカリキュラム改訂や社会からのニーズとの整合性を検討

§ 工学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部宣言を具現化するために、教育内容や教育環境の向上をはかる。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

- ・平成 20 年度末までは工学部 FD 活動の多くは ISO9001 教育マネジメントシステムの活動によっていた。学部の現状により相応しい効果的な体制を検討した結果、平成 21 年度から、マネジメントサイエンス学科およびソフトウェアサイエンス学科の 2 学科は ISO9001 のシステムの運用を維持することにした。一方、機械情報システム学科は学科の状況に適した PDCA のサイクルを運用することにした。学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観など、授業評価総合検討会および主任会、教務担当者会で運営している。
- ・全専任教員参加による工学部 FD 研修会を年 1 回開催。

(3) 平成 21 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

ISO9001 に関しては、平成 16 年 3 月にマネジメントサイエンス学科が登録され、平成 18 年 3 月、全学科に拡大された。20 年度には、新学科編成に対応した第 10 版マニュアルに改定した。今年度には、マネジメントサイエンス学科およびソフトウェアサイエンス学科の 2 学科向けの第 11 版マニュアルに改定した。機械情報システム学科では ISO にて実施していたものとは異なる新たな「授業チェックシート」を作成し、学科会内で実施される「授業評価検討」とともに PDCA のサイクルの運用の基本にすることにした。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

- ・平成 14 年度から実施してきた学生による授業評価は、平成 16 年度秋から全教員・全科目に拡大し、平成 17 年度秋からは ISO9001 に対応するためアンケート項目を改定し、体制を諮問委員会である自己点検委員会から教務担当者会に移し、業務体系の中で実行している。21 年度も ISO9001 運用学科・非運用学科ともに同様に実施を継続している。
- ・公開：各教員には全体の集計結果と個人の科目別データ。学外 Web には全体の集計結果公開。学内 Web に全情報を公開（科目別集計シートにおいて教員名は除く。科目担当情報により間接対応可能）。学内 Web と同じ内容を冊子として、玄関ロビーで学生に公開。
- ・結果の活用：ISO9001 運用学科・非運用学科ともに Semester 末に学科毎に行なわれる授業評価検討会における、各科目の評価、来期への目標設定の中で各教員の授業改善に生かされる。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

平成 21 年度実施件数

機械情報システム学科	6 *
ソフトウェアサイエンス学科 (含むメディアネットワーク学科)	2
マネジメントサイエンス学科	2

* : (内 3 件は参観者無し)

④ 研修活動の組織的な取り組み

- ・全学 FD 委員会で計画されたプレゼンテーション研修会には工学部からは新任の下記 1 名が参加した。

第 1 回 : 小林 直樹 助教 (マネジメントサイエンス学科)

⑤ その他の取り組み

(1) 工学部 FD 研修会 平成 22 年 3 月 18 日 14:00~17:45

(i) 「基礎学力の向上について」

機械情報システム学科 学科主任 山田 博三

箕輪 功 (数学基礎演習について)

黒田 潔 (物理学 A/B の学習支援について)

ソフトウェアサイエンス学科 教務担当 山崎 浩一

マネジメントサイエンス学科 学科主任 小野 道照

(ii) 「FD 活動の最近の動向」 工学部 FD 委員 小倉 研治

(2) 機械情報システム学科研修 平成 22 年 1 月 14 日 17:00~17:45

「特別学習指導 (発達障害学生の指導)」

教職大学院 阿久澤 栄 助教

(4) 今後の予定や課題

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。マネジメントサイエンス学科・ソフトウェアサイエンス学科の 2 学科は IS09001 活動を通じて教育活動の PDCA サイクルによる改善を継続する。一方、IS09001 活動を平成 20 年度末で打ち切った機械情報システム学科ではこれまでの IS09001 活動における経験を活かして、当学科により適した方法で教育活動の PDCA サイクルによる改善活動を今後も維持する。授業参観 (研究授業) を含め学部全体としての FD 活動については検討課題となっている。

以上

S 経営学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ①質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）の輩出。
- ②玉川の教育理念を基盤とした経営学教育の実現。
- ③21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあつて、運営を維持しうる体力をもった学部の形成。
- ④玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部の形成。

(2) 学部における FD 活動の組織体

- ①学部の専任教員が参加する FD 会議（年 5 回）を教育研究会およびワークショップの形式で開催。
- ②経営学部教員研修会（専任教員のみで 2 回開催）を今後も継続して実施。

(3) 平成 21 年度の活動内容

①授業内容・方法に関する研究（継続）。

FD 会議にて協議。特に授業評価アンケートのデータ分析と今後の活用について検討。なお、授業評価アンケートに関する教員（非常勤教員も含む）へのアンケート調査を実施（10 月）。

②教員研修会の開催（継続）。

- ・FD 会議(10 月 29 日実施)
二宮智子先生「春学期授業評価結果のデータ分析」、報告及びディスカッション
- ・第 11 回教員研修会（3 月 3 日実施）
 - ①海野博先生「経営学部の今後の運営について」
 - ②二宮智子先生「経営学部の数学教育について(短期米国留学の成果報告)」
 - ③鈴木康之先生「授業評価に関する教員アンケートの結果について」、報告及びディスカッション
 - ④川島啓二先生（国立教育政策研究所）「学びを基調とする大学教育への転換」講演及び質疑応答、その後ワークショップを実施。

③専門科目共同授業に関する研究（継続）。

④リメディアル教育に関する研究（継続）。

リメディアル教育（A0 入試合格者および指定校・公募推薦入試合格者対象）の実施。

今回は国際経営学科では高校生が 82 名、父母 16 名、観光経営学科では高校生が 42 名、父母 8 名が参加し、2010 年 2 月 22 日の体験授業と学部・学科ガイダンスとして実施。

- ・第 9 回英語科目担当非常勤教員研修会の開催。
3 月 29 日 11 時～15 時実施

⑤一年次教育に関する研究（継続）。

⑥学生確保に関する研究（継続）。

⑦学部・大学院一貫教育、カリキュラム改革についての研究（継続）。

⑧その他の取り組み

・インターンシップ

8月～9月に実施。その後、国際経営学科、観光経営学科それぞれで今後の実施について検討。

・FDフォーラム（2010年3月6～7日、同志社大学で開催）に、稲垣明博先生と島義夫先生が参加。次年度のFD会議で、報告と討議を予定。

（４）今後の予定や課題

①授業内容・方法に関する研究（継続）。

②教員研修会の開催（継続）。

③専門科目共同授業に関する研究（継続）。

④リメディアル教育に関する研究（継続）。

⑤一年次教育に関する研究（継続）。

⑥学生確保に関する研究（継続）。

⑦学部・大学院一貫教育についての研究。

⑧FDに関する組織的な対応、取組の強化に関する検討。

S 教育学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指している。指導に当たる教員は自らの資質と能力を向上させ、社会に貢献できる人材育成を行うことを通して、大学・学部の競争優位性を高めることが教育学部 FD 活動の目標である。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

教育学部長、学科主任、教務主任、学生主任、教務・教職担当及び FD 委員で組織する。

(3) 平成 21 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

本学部では社会が求める人材の育成をすることにより、学部の競争優位性を高めることを FD 活動の目標として掲げているが、全教員が担当する教育実習・保育実習での研究授業の訪問指導、またこれらの学校訪問の機会を単に学生指導にとどめるだけではなく、訪問校、園などの学校長や園長、施設長など学校責任者との面談を通して、教育現場の現状や社会的要請と教育の成果や改善すべき点等を調査する機会を FD 活動と位置付けている。さらに、毎年行っている教育長・学校長・園長・施設長などとの協議会において本学部に対する意見・要望を聞くことを通しても FD と人材育成に反映させようとしている。その結果を踏まえて平成 21 年度もコミュニケーション能力の低下や自然体験の不足を補完するものとして、教員が学生と共に参加した野外教育研修や tap 研修などのプログラムを教育計画に組み込み実行した。また、コスモス祭を表現力・創造力・実行力・伝達力などの育成を図る教育機会として捉え、学部全体で組織的に取り組み、教員と学生が共に育つ「共育」の成果として現れるように FD 活動を実践した。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

学生による授業評価はリフレクションシートとして春、秋セメスター終了時に実施し、講義内容や教授方法の改善点はどのようなところにあるのかを調査した。今年度も授業評価の結果を学部長への教育活動報告書に記載してもらった。今後は授業評価の結果を教員と学生が共有出来るようにしたい。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

教員相互の授業参観については、あえて特定の時間を設けず、いつでも授業の参観ができるような体制をとっているが、教員それぞれの持ち授業時数が多いためか、あまり相互参観が進んではいない。しかし、今年度もゼミ論発表会では、複数のゼミが公開発表を行い 2 年間のゼミ内容の集大成を見てもらった。

④ 研修活動の組織的な取り組み

- ・ 平成 17 年度から開始された一年次教育に関する研修を主な題材にして、答申「我

が国の高等教育の将来像」を踏まえ、基礎力の充実に図るために求められる教員の資質と能力の向上を目指して1年次、2年次の担任が中心となって今年も学内で1日ではあるが研修を行った。このことは教育学部の独自性を発揮すべく内容を再構成し、一昨年まで2年次の「担任ゼミ」を無単位で行ってきたが、昨年度より必修として単位化し「キャリア演習」として教育効果の充実に向け取り組んでいる。

- ・ 教員の資質と能力が、教職に対する愛着、誇りに支えられた知識、技能等の総体であることを、学部長をはじめFD委員が中心となり各種の会議等で発言し、FD活動基盤の意識化を進めた。
- ・ 他大学におけるFDフォーラムに参加しFD活動の内容と実態を把握し、本学部の将来構想や各教員の資質と能力の向上を図るようにしている。

⑤ その他の取り組み

平成17年度、平成18年度に採択を受けた教員養成GP「実践的指導力を育てる体験学習プロジェクトー地域連携プログラムの検証と研究ー」の推進過程は、学部のFD活動にも大きな寄与があった。教員養成に係る学部教員にとって、当GPの各プログラムの遂行・省察の過程は、学部全体の方向に照らして各教員の教授行動を振り返り、改善を求める過程であった。「教員としての資質能力に関する調査」「各種体験学習プログラム」「教材・教授法開発プログラム」「宿泊集団生活体験プログラム」「シンポジウム」等への参画は、そのまま学部教員のあり方を強く示唆するものであった。

その意味においてFD活動にも、学部の独自性なり性格に基づいてのFDのあり方を考えさせる契機でもあったといえる。また、日常的な教育活動と密着してのFDのあり方を考えさせるものでもあった。これらの点、今後、より充実したFD活動に向けていきたいと考える。

(4) 今後の予定や課題

本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える学部の形成を進めるために一層のFD活動を推進する。具体的には、講義科目の授業評価アンケートだけではなく演習、実習、実技科目についてのアンケート用紙を作成し実施すること、そして、22年度はマークシート型のアンケート実施し、その結果を集計し学部内そして学生への還元が課題でもある。

§ 芸術学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ・ 芸術学部のミッション「芸術による社会貢献」の意図を理解するとともにそれを実践する人材育成が学部全教員の目標であることを認識し、その達成のための方途を探究する。
- ・ 三学科それぞれの特性を反映した独自のカリキュラムに加え、学科相互間の学習連携の実現を強く意識したカリキュラムをも合わせて設定することで「社会貢献」に対する幅広く有意義な体験の機会を持たせる。
- ・ 「芸術による社会貢献」達成のための具体策として多様な職業の理解と就職することへの意識向上を図る。そのためにキャリアセンターとの連携を密にし、各種就職説明会および試験等の企画と実施に各学年の全担任が協力する。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

芸術学部長を中心に主任会メンバーがこれに当たる。毎月の主任会と主任研修会で活動目標とその達成手段を検討し、随時その成果及び新たな方策等を拡大教授会で報告する。

(3) 平成 21 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況・成果）

- ・ 芸術学部では各セメスター終了時に、成績報告と各学科学年の GPA グラフを保護者に送付している。これにより学生及び保護者に、学生の就学状況の認識を促している。
- ・ 成績不振学生に対しては、次セメスター履修登録前に、芸術学部独自のスケジュールによる履修継続特別指導を行い、また指導記録を作成している。この業務により、成績不振の学生の継続的な指導が、可能になっている。
- ・ 通常授業とは別に、芸術学部の学生としての基礎的学力・知識向上を図るために、芸術教養テストを春セメスター1・3年次生に「アート・スタンダード・テスト」として4年間実施した。成績は予想以上に良好であり、学生の関心を広げる効果があったと看做せる。準備段階であるテキストは用語集をまとめ、出版の準備段階に入った。
- ・ 学生の言語スキル育成の一環として、メディア・アーツ学科において外国人専任担当による、主に音楽分野を対象とした「アート・イン・イングリッシュ」を開講し、4年が経過した。今後はコア科目の言語関連科目との関連性、及び芸術諸分野を統合した授業内容を考察する必要がある。
- ・ 卒業プロジェクトを中心に、優秀な成果を修めた学生に授与する芸術学部長賞を創設した。本年度はその第5回にあたり、メディア・アーツ学科も第1回目の卒業プロジェクトの制作発表を行った。
- ・ 教科書編纂事業を各学科において検討中であった。ビジュアル・アーツ学科では1年次基礎科目の「デザイン基礎」のテキストを作成した。メディア・アーツ学

科では「動きの造形原理とアートアンドデザイン」テキストを作成した。

- ・音楽系では特にピアノ等の実技レベルに応じた履修クラス分けを徹底した。演劇・舞踊系では科目「パフォーマンス」に繋がる表現領域・企画等の科目内容を充実した。ビジュアル・アーツ学科は実技を演習科目とし、メディア・アーツ学科との連携を打ち出した。これらにより、学生の多様化するニーズに徐々に対応してきていると考えられる。
- ・ビジュアル・アーツ学科とメディア・アーツ学科では、昨年度に続き、ビジュアル・アーツ学科の中心的科目であるエキジビション（ファッションショー）において、協同授業を行った。来年度はより本格的な協同授業の取り組みを行い、授業効果を挙げると同時に、両学科の学生のニーズに応じていく。
- ・就職指導への取り組みとして、学生の SPI 試験、VPI 試験、R-CAP 試験を継続する。

② 学生による授業評価（活用状況・公表）

平成 18 年度から芸術学部として授業評価アンケートの回答用紙を作成し、芸術学部開講科目（受講者 30 名以上の講義科目）を対象に補講・試験期間内で実施してきたが、平成 21 年度も同様に継続した。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

三学科共に産学連携プログラムにおいて、校内教員のみならず学外者による授業参観を実施した。尚、連携先としてパフォーミング・アーツ学科<青山円形劇場>、メディア・アーツ学科<デジタルプラネット Music Japan TV>及び<相模原・町田大学地域コンソーシアム>、ビジュアル・アーツ学科<町田市立博物館>などがあり、社会の文化施設との連携の中で行われているといえる。これらの連携授業は、学内からも複数教員の協同によって成立するものであり、教員相互による授業参観は必然的となっている。

また上記したファッションショーでは、今年度実績の学習効果をより向上させるために両学科を連携による教員相互の授業参観も、本格化する。

④ 研修活動の組織的な取り組み

一年次セミナーの授業時間の有効活用と、内容理解充実のために芸術学部独自の方式を継続的に模索中であり、実験的授業を新入生研修で実施した。この成果のデータ化には時間を要するが、学部内担当教員による授業内容改善の話し合いが行われており、今後も継続する。

⑤ その他の取り組み

- ・ e エデュケーションの促進
メディア教育推進室の協力を得て、授業における Blackboard 活用を促進しつつある。「エキジビション」「メディアプロジェクト」などの学科を横断する授業において、その活用を計画している。
- ・ 教員の業績報告・研究者情報総覧記入の徹底と研究内容の明確化を促進する。これは教員個人の業績をあげるばかりか授業改善にも繋がり、その研究成果を学生へ還元することを重要目的としている。
- ・ 年度末に専任教員と非常勤教員のコミュニケーションと教育目標の確認を目的

とした懇親会を行った。

(4) 今後の予定や課題

- GPA 向上、附加能力向上とともに、社会貢献の機会と場の獲得のための重要課題の一つである就職と、どのように取り組むかを教員、学生双方に認識させていく方途を考えなければならない。特に今の社会情勢から想して3年次早期からのプログラムを検討する必要がある。3年次においてキャリア教育の科目化を計画中である。また、学部パンフレットにおいて1年次からのキャリア支援プログラムを明らかにした。
- 様々な試みの継続と発展を心掛けていく必要があるが、その整理も必要と考えられる。例えば難しい面があるが、教員の業務の偏りをできるだけ減らし、各教員のモチベーションの向上を図る必要もあろう。
- いろいろな外部発表に関連する科目等において、研究成果のまとめや報告書などの整備が必要と考えられる。

§ リベラルアーツ学部

一昨年度、文学部リベラルアーツ学科を発展させた形でリベラルアーツ学部リベラルアーツ学科が発足したことに伴い、FD活動は両学科で共通して行われた。

(1) FD活動への取り組み理念・目標

近年、大学を取り巻く環境が大きく変化し、さまざまな形で大学改革が進められる中において、昨年度より大学設置基準でFDが義務化され、大学教育の質保証のためにFD活動は重要課題になっているが、本学部においては、文学部リベラルアーツ学科開設時よりFD活動に積極的に取り組んでいる。学部・学科設置の趣旨と教育目標、ならびにリベラルアーツ教育の理念をいかに実現するかという視点から、日頃の教育研究活動の改善へ向けたFD活動を展開するように心がけている。

(2) 学部におけるFD活動の組織体制

学部長、学科主任等各主任、FD委員を中心に、所属教員全員が主体的にFD活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

(3) 平成21年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況・成果）

FD研修会の開催、学生による授業評価の実施、教員相互の授業参観への取り組み、学外研修への参加などの活動で、概ね成果をあげることができた。

② 学生による授業評価（活用状況・公表）

各教員がそれぞれの授業形態に応じて、授業に対する学生のリアクションや評価を確認しながら、授業運営の改善に努めた。授業アンケートは、1年次必修科目を中心に実施し、学生にフィードバックするとともに、結果を授業運営に反映させた。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

本学部においては、学際的アプローチを研究と教育の特色にしており、専門分野の異なる複数の教員が協働して担当する授業科目や教育活動が多くあり、必然的に教員相互の授業参観の機会が伴っている。それらの科目を中心に、教授方法や指導・評価方法について教員相互に客観的把握と意見交換を行い、改善に努めた。

④ 研修活動の組織的な取り組み

教育研究活動の改善へ向けて、日頃から学部全体で取り組んだが、本学部に特徴的なFD活動として、9月23日～24日および年度末（2月18日）に、学外施設において集中的に、ほぼ全員の教員が参加してFD研修会を実施した。

9月の研修会では、本学部完成年度（2010年度）以降の新カリキュラム体系の課題と方向性を検討した。

年度末の研修会では、(ア)まず、千葉県立千葉高等学校教諭の堀亨氏の講演「発

展的学際教育—高等学校理科から見たリベラルアーツ型アプローチの可能性—」を実施し、本学部における科学教育のあり方について検討した。(イ)次に、9月の研修会で検討した新カリキュラム体系をさらに具体的に検討し、最終案をまとめた。また、来年度1年生研修の計画と運営のあり方についても検討した。

これらの研修会の開催は、日頃の教育活動の点検調査を行い、今後の教育活動を推進していく上で極めて意義深かった。

⑤ その他の取組み

プレゼンテーション研修会には本学部から3名が参加し、授業におけるプレゼンテーションスキルの向上に努めた。

財団法人大学コンソーシアム京都主催「第15回FDフォーラム：学生の学びを支える一つなぐFDの展開—」（3月6日～7日）に1名が参加した。

京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第16回大学教育研究フォーラム」（3月18日～19日開催）に1名が参加した。

これらの外部機関が主催するセミナーへの参加から、大学教育やFD活動に関する貴重な情報が得られた。

(4) 今後の予定や課題

- ①これまでと同様、FDへの意識をより高めるとともに、インターアクティブな相互研修を基盤とするFD活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図っていきたい。
- ②学部運営の「PDCAサイクル」の中にFD活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを構築していく必要がある。
- ③中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を踏まえ、リベラルアーツ学部における「学士力」とは何かについて検討し、それを本学部完成年度（2010年度）以降の新カリキュラム作成に反映させることが今後の課題となる。

Ⅱ 教員研修

1. プレゼンテーション研修会

(1) 実施の概要

平成 14 年から 17 年までは年に 5 回、平成 18 年以降は年に 3 回、実施している。今年も、夏休みに 2 回、春休みに 1 回、合計 3 回実施した。本年の参加数は 16 名で、平成 14 年の第 1 回からの延べ人数は、239 名（うち在職者は 201 名）となり、専任教員の 8 割以上が受講済みとなった。新任教員や希望者を中心に、今後も年に 3 回程度の研修会を続行し、教員の基礎体力ともいえるプレゼンテーション力を維持管理していく予定である。

3 回のクラスすべてにおいて、積極的で効果的な運営が行われた。プレゼンテーション技法の向上だけでなく、教員間のコミュニケーションを図る上でも非常に効果的であった。特に FD 活動は「協同作業」で行うものであることを考えると、ここで培われた教員同士のつながりは貴重なものである。この教員間の輪を大切にしていけることが、さらに幅広い FD 活動へと発展するための鍵となり、最終的には学生への教育の質を高めることに役立つと確信するものである。

(2) 研修プログラム内容

2 日間、朝 9 時から 17 時までの日程で、演習が中心の内容である。特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

第 1 日目	第 2 日目
第 1 章：プレゼンテーションの基本 第 2 章：視聴覚教材の使い方	第 3 章：質疑応答の技法 演習 3：基本的な技法の演習 演習 4：ディスカッション
演習 1：模擬授業 プレゼンテーション (1) 演習 2：改善点の明確化 ビデオ視聴による改善作業	演習 5：模擬授業 プレゼンテーション (2) 第 4 章：まとめ 演習 6：アクション・プラン作成

(3) 実施の状況

開催の日程、参加人数、開催場所は以下のとおりである。参加者詳細は、(7)「参加者一覧」参照のこと。

- ・第1回： 8月04日(火)～8月05日(水) 6名 研究管理棟 507 教室
- ・第2回： 9月17日(木)～9月18日(金) 4名 研究管理棟 210/211 会議室
- ・第3回： 2月17日(水)～2月18日(木) 6名 研究管理棟 507 教室

昨年までのコメントを反映させ、本年度より開催場所を研究管理棟の5階の教室に変更した。昨年までの研究管理棟 210・211 会議室は、“通常の教室と環境が違いすぎる”というコメントが多かった。その結果、模擬授業が違和感なくスムーズに実施できたと思う。ただし、第2回目のみ教室が取れずに会議室で実施した。

(4) 実施後のアンケートから

アンケート項目は、継続的に変化を捉えるために、1年目から同じにしている。項目ごとにA～Eまでチェックするものとフリーコメントの両方からなる。

(4) - 1 チェック項目の集計結果

以下は、チェック項目の結果である。「#」はクラス番号で、その列の第4行、「計」(網掛け行)は3クラス分の合計である。「点」はA=5、B=4、C=3、D=2、E=1とした平均である。合計人数には無回答を含めていないので、項目によって人数が異なる。

参考のため平成14年から平成20年までの平均も下段に載せた。1年目は多少低いが、2年目以降、概ね4.5ポイント以上で数字に変化がない。当該研修会の重要性が理解され、内容や運営も定着してきたことを示す数字と捉えることができる。

①「 全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	4	2	0	0	0	6	4.7	1	4	2	0	0	0	6	4.7	1	2	3	1	0	0	6	4.2
2	4	0	0	0	0	4	5.0	2	4	0	0	0	0	4	5.0	2	1	3	0	0	0	4	4.3
3	3	3	0	0	0	6	4.5	3	4	2	0	0	0	6	4.7	3	4	2	0	0	0	6	4.7
計	11	5	0	0	0	16	4.7	計	12	4	0	0	0	16	4.8	計	7	8	1	0	0	16	4.4
20年	16	4	0	0	0	20	4.8	20年	14	3	1	0	0	19	4.5	20年	3	13	3	0	0	19	3.8
19年	20	3	0	0	0	23	4.9	19年	20	2	1	0	0	23	4.8	19年	10	11	2	0	0	23	4.3
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	12	4	0	0	0	16	4.8	18年	3	11	2	0	0	16	4.1
17年	28	5	1	0	0	34	4.8	17年	27	7	0	0	0	34	4.8	17年	12	16	5	0	0	33	4.2
16年	29	3	1	0	0	33	4.8	16年	28	4	1	0	0	37	4.8	16年	10	21	3	0	0	33	4.2
15年	34	3	1	0	0	38	4.9	15年	32	4	1	0	0	37	4.8	15年	12	22	2	1	0	37	4.2
14年	41	15	2	1	0	59	4.6	14年	43	14	2	0	0	59	4.7	14年	10	38	6	4	0	58	3.9

② 研修会の質について

講習内容								講師								テキスト、教材、教具							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1	0	0	0	6	4.8	1	6	0	0	0	0	6	5.0	1	4	2	0	0	0	6	4.7
2	3	1	0	0	0	4	4.8	2	4	0	0	0	0	4	5.0	2	3	1	0	0	0	4	4.8
3	4	2	0	0	0	6	4.7	3	6	0	0	0	0	6	5.0	3	5	1	0	0	0	6	4.8
計	12	4	0	0	0	16	4.8	計	16	0	0	0	0	16	5.0	計	12	4	0	0	0	16	4.8
20年	12	7	1	0	0	20	4.6	20年	21	2	0	0	0	20	5.0	20年	19	4	0	0	0	19	4.6
19年	14	9	0	0	0	23	4.6	19年	21	2	0	0	0	23	4.9	19年	19	4	0	0	0	23	4.8
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	15	1	0	0	0	16	4.9	18年	14	2	0	0	0	16	4.9
17年	21	12	0	0	0	33	4.6	17年	33	1	0	0	0	34	5.0	17年	29	4	1	0	0	34	4.8
16年	27	6	0	0	0	33	4.8	16年	32	1	0	0	0	33	5.0	16年	29	4	0	0	0	33	4.7
15年	26	10	1	1	0	38	4.6	15年	35	3	0	0	0	38	4.9	15年	31	5	1	0	0	37	4.8
14年	36	17	3	2	0	58	4.5	14年	51	6	1	0	0	58	4.9	14年	40	17	2	0	0	59	4.6

③ 研修会の運営について

日程								時間配分							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	2	3	1	0	0	6	4.2	1	5	1	0	0	0	6	4.8
2	2	2	0	0	0	4	4.5	2	2	2	0	0	0	4	4.5
3	2	4	0	0	0	6	4.3	3	6	0	0	0	0	6	5.0
計	6	9	1	0	0	16	4.3	計	13	3	0	0	0	16	4.8
20年	13	4	1	0	0	18	4.4	20年	17	6	0	0	0	19	4.4
19年	9	13	0	0	0	22	4.4	19年	17	6	0	0	0	23	4.7
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	11	5	0	0	0	16	4.7
17年	20	10	10	0	1	32	4.5	17年	26	6	1	0	1	34	4.6
16年	24	8	1	0	0	33	4.7	16年	26	6	1	0	0	33	4.8
15年	24	9	5	0	0	38	4.5	15年	31	6	1	0	0	38	4.8
14年	28	19	3	5	3	58	4.1	14年	40	16	2	1	0	59	4.6

開催場所								事務処理・連絡							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	6	0	0	0	0	6	5.0	1	6	0	0	0	0	6	5.0
2	4	0	0	0	0	4	5.0	2	3	1	0	0	0	4	4.8
3	4	2	0	0	0	6	4.7	3	6	0	0	0	0	6	5.0
計	14	2	0	0	0	16	4.9	計	15	1	0	0	0	16	4.9
20年	14	4	2	0	0	20	4.6	20年	19	3	2	0	0	20	4.7
19年	17	5	1	0	0	23	4.7	19年	19	3	2	0	0	24	4.7
18年	10	5	1	0	0	16	4.6	18年	8	7	1	0	0	16	4.4
17年	29	5	0	0	0	34	4.9	17年	19	9	3	1	1	33	4.3
16年	24	7	1	0	0	32	4.7	16年	22	9	2	0	0	33	4.6
15年	22	12	2	1	0	37	4.5	15年	16	16	1	2	1	36	4.2
14年	17	24	6	6	0	59	3.6	14年	14	20	15	7	2	58	3.6

④ 研修会の開催について

研修を継続すべきか								他の人に参加を勧めるか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1	0	0	0	6	4.8	1	4	2	0	0	0	6	4.7
2	4	0	0	0	0	4	5.0	2	3	1	0	0	0	4	4.8
3	4	1	0	0	0	5	4.8	3	4	1	0	0	0	5	4.8
計	13	2	0	0	0	15	4.6	計	11	4	0	0	0	15	4.7
20年	14	4	1	0	0	20	4.5	20年	12	7	0	0	0	19	4.4
19年	18	2	2	0	0	22	4.7	19年	18	3	1	0	0	22	4.8
18年	14	1	1	0	0	16	4.8	18年	12	4	0	0	0	16	4.8
17年	23	6	2	0	1	32	4.6	17年	23	7	2	0	0	32	4.7
16年	27	5	1	0	0	33	4.8	16年	29	4	0	0	0	33	4.9
15年	33	4	0	1	0	38	4.8	15年	34	2	1	0	0	37	4.9
14年	46	9	2	2	0	59	4.7	14年	41	14	2	2	0	59	4.6

(4) - 2 フリーコメント概要

項目別の数字によるポイントはすでに安定しており、改善項目を洗い出すという点では無意味である。こうした場合、ますますフリーコメントの重要性が増すことになる。16名のほとんど全員がコメントを書かれており、総数は63件あった。記述的に書かれたコメントを集計することは、大変労力を要するが、この中には多くのメッセージが含まれているので、今後も集計をしていきたい。

ここでは、コメントをカテゴリー別に分け、数の多いものや注目すべきものを中心に、私見を含めて記述する。

■「有用性」についてのコメントは21件あった。その多くは、「改善点がわかった」「改善の重要性に気づいた」「授業方法を再確認できた」など、「気づき」に関するものである。これは、ビデオで自己を客観的に見たことが大いに関係すると思われる。教育現場では、改善の必要性を感じながらも切羽詰ったものとして捉えていないことが多い。当該研修会が刺激となり、FDに関する意識の向上に効果があったのではないかと思う。また、「授業に役立つヒントを得た」「具体的なアドバイスを得て役立った」などのように、具体的なコメントもあり、当該研修会が授業改善に有意義であることを感じた。

■「内容」では、ほぼ満足していただいているようで、現在のカリキュラムの改善コメントはなかった。ただ、「半年後に成果を確認する研修会を開いてほしい」など当該研修会をさらに発展していく意見や、「最新機器の使い方を内容に含めてほしい」といったより充実するためのコメントがあった。最新機器に関しては、今後希望する研修としても挙げられており、電子黒板やIT関連を授業に有効利用したいという積極的な姿勢を感じた。今後の研修会開催の参考としていきたい。

また「ディスカッション」に関しては、教員同士のコミュニケーションを図れたとの感想があり、有効であることがわかる。ただし、もう少しFDに特化した内容で議論するべきであるという意見もあり、今後は運営でカバーしていきたいと感じた。

■「日程」については、昨年同様、「半日ずつ2日間がよい」「1.5日にしてほしい」などのいろいろな意見もあったが、今のままの「2日間でよい」という意見も同じ数だけあり、2日間の日程は了解されていると考えてよいと思う。

本年度は人数が少なかったため、模擬演習の時間が短縮されてほぼ4時または4時半に終了することができた。そのためか、毎年出てくる「終了時間を早くしてほしい」といったコメントは皆無であった。

■「希望する研修」は、過去最大のコメント数で、全体の1/3を占めた(23件)。ここからも、多くの教員が何らかの研修会への参加を希望していることがわかる。実際に自ら参加する教員が多いかどうかは不明であるが、FD活動の一環として、研修メニューを増やすことは必要だと感じた。

希望する研修の種類は、多岐に亘っているが、大きく分けると、PowerPointやBlackboard、あるいは電子黒板など「機器に関するもの」、グループ討議やディベートなど「講義以外の授業形態に関するもの」、そしてプレゼンテーション研修会の同じ部内実施など「授業改善に関するもの」の3つのタイプに分かれた。

今後の研修メニューを考えていくための貴重な意見として、参考にしていきたい。

(5) ディスカッションの実施

2日目午前中のディスカッションは、FD活動の基盤となるコミュニケーションを円滑にする重要な役割を担っている。参加者にも好評で、全員で熱く語り合うことができた。参加者のコメントからも、もっと時間をとって本音で話し合い、その意見を集約して、さらなる改善に結びつけていくことが、次のステップとして必要だと感じる。

これだけ大規模な大学の中で、学部・学科という壁を越えて本音でフリーディスカッションをすることは、大変価値がある。コミュニケーションが円滑になるという効果だけでなく、FDに関する共通理解を得られることが、より重要である。FD活動について共感しあって築いた人間関係が、これからのFD活動を学部・学科を越えて広げていくための原動力となると感じている。

ディスカッションでは、FD活動関連だけでなく、組織的なことや施設のことなど多岐にわたる意見交換が行われた。いずれにしても、“より質の高い教育をしたい”、“玉川大学の価値を高めたい”、“学生に満足してほしい”という熱意に溢れている意見ばかりである。教員一人ひとりの熱い思いが感じられた時間であったと思う。これらの意見は、積極的かつ建設的なものばかりであり、今後のFD活動の幅を広げるための参考になると考えられる。昨年あたりから、「FD委員も含めて実施したい」「事務職員も含めて実施したい」というコメントも増えてきた。是非、FD委員会ですべての意見を検証して、実施可能なことは実施の方向に進めていきたいと思う。

本年度は、単に意見を出しっぱなしにせず、それに対する改善策まで議論が及んだことが特徴として挙げられる。ディスカッションの内容がより深くなったと考えられる。また、玉川大学としての方針、全人教育やFYEに関する積極的意見が多く、より具体的な提案が出されたことも特記に値する。

また昨年度あたりから、参加者のうち新任教員の割合が多くなったため、成績評価の仕方など、実務での悩みなども表面化してきた。これらも含めて、FD活動に取り入れることができると思う。

ここでは、ディスカッションで出た意見を、クラス別に列挙する。3クラス分を統合せずにクラス別にするのは、フリー・ディスカッションの形式にしたため、出てきたテーマがクラス別に異なるからである。また、なるべく生の声が聞えるように、抜粋したりまとめたりしないで、単に内容別に分類するだけにとどめて記述する。なお、掲載にあたっては、参加者全員にコピーを送付し、事前承諾をいただいている。

第1回 (8/4~5) (名簿順、敬称略)

有源探ジェラード、中嶋真美、宮田徹、小林直樹、馬場眞二、梶川祥世 (計6名)

このクラスでは、最初に「学生の質」の低下が指摘され、具体的に「うるさい学生」への対処案などが出てきた。また、それに従って、シラバスの工夫、出席カードの工夫などが紹介され、さらに「成績評価」についての議論に発展した。

★学生の質について

- ゆとり教育の影響か、質が下がっている
- 質低下の例
 - コピペをしたレポートが出る (すぐ分かるコピペ)
 - ネット上の情報に疑いを持たない
 - 体験学習をしても成果が出るまでできない
 - 農業は、育てて出荷するまで考える必要があるが、体験で終わってしまう
- 学生の能力の格差がありすぎる (優秀な学生もたくさんいる)
- 遅刻する学生が多い
- 7割もF評価をつけざるを得なかった状況もある → 成績評価
- レベル別の授業をする必要がある
 - 英語は能力別クラスにしている
 - 学生の希望も聞いてクラス分けする
 - 入学時に学生の能力を把握する試みをしている (農学部)
- 授業数が多いため、本来学ぶための活動時間が少ない
 - 真面目に予習・復習をしたら、学習時間がなくなってしまう

★授業運営のヒント

騒がしい学生への対応

- 怒鳴って一瞬静かになるが、すぐにさらに騒がしくなってしまう
- じっと黙ったほうが静かになる効果がある
- 最初の授業のときに、静かにさせるのがコツ
- 大教室では、特定の名前を呼んで注意すると効果的である
- 出席カードを使って指名発問をする

出席カードの利用法

- 遅刻者のカードは端を切るなどの工夫をする
- 出席カードの裏に質問を書かせると、コミュニケーションが図れる

コピペ問題に関する工夫

- 同じテーマのレポートを読み上げて確認した → 手間がかかる
- コピペが悪いのではなく、そのまま貼り付けている (自分のものになっていない)

★シラバスについて

- 同じ科目なら、なるべく統一するようにしている（工学部）
- 同じ科目でも、統一せずに各教員の特色を出すようにしている（人間学科）
- 学部や学科によって、統一するか否かは異なる
- 学習目標が同じであれば、詳細な内容は異なってもよいのではないか
- 到達目標に至るための授業であるから、到達目標が一致していれば問題ない

★成績評価について

F評価について

- 7割をFにしたケース（工学部）があるが、問題ないか
 - 最初に学生に「評価項目」を示しているので、それに準拠して評価できる
- 大学の厳しさを最初に教えるべきである
- 救いようがない場合、無理にCにするべきではない
- 4年生の場合は、考慮が必要である（就職に関連）
- 最後にFを示すのではなく、途中で現状の成績をフィードバックするとよい
- 再履修の学生が多くなった場合のインフラが整っていない（授業、教員）

評価基準がほしい

- 評価基準がないと、7割にFをつけるには勇気が必要である
- 評価基準を示してくれると、安心して評価できる
- 学生に評価基準を最初に示すとよい
- 音楽や哲学など、明確な基準を示すことができない科目もある

★その他の意見

FYEに関する意見

- 101があるため、レベル合わせをすることができる
- 同じテキストでも教える教員によって、内容や効果に差が出ている
- 教える側のレベルも合わせる必要がある

FD活動に関する意見

- 大学の教育向上を目指すのはよいことである
- 文科省の指示とおりにするのではなく、独自のプログラムで向上を図るべきである

第2回(9/17~18)(名簿順、敬称略)

浅田真一、宮崎豊、岩田恵子、永井悦子 (計4名)

このクラスは4名という少人数だったが、活発な議論が展開された。「学生の質」の低下から始まり、「教員と学生の関係」にまで話題が広がった。また、FD活動に関しても、前向きな意見が多く出された。

★学生の質について

- 学生同士のコミュニケーションが少ない
 - クラブ活動への参加も少ない → 情報交換が少ない
 - 学生同士で学ぶ力がない → 何でも教員に聞いてくる
 - クラブ活動でなくても、学問的な場があればよいのでは？
- 101、体育祭、音楽祭などでコミュニケーションが図れるので、それを利用するとよい
- マナーが悪い学生が多い
 - 授業中におしゃべりをする
 - 授業中に飲食をする
 - あいさつができない

★教員と学生の関係

- 昔に比べると、教員と学生の距離が離れている
- 玉川教育のよさは、教員と学生の距離が近いことにある → それが崩れている
- 教員の居場所、学生の居場所がない(明確な目的がなくてもいられる場)
- 教員と学生が共用できる学問的な場(サロンの場)がほしい
- 教員の仕事が多岐に亘るため、忙し過ぎることも原因である
- 教員の環境によって、学生との距離には差がある
- コスモス祭などの機会にコミュニケーションを取ることができる

★授業運営のヒント

- 教員の注意は端的に分かりやすく！(おしゃべりなど)
- 一度、「教員は怖い」ということを示すのもよい
- 最初にルール作りをするとよい(飲食や挨拶など)
- 目的を最初に示すとよい(何のために、これを学習するのか?)
- 複数の教員で相談して授業内容を決定している学部もある → 効果的である
- 文章表現の指導方法がむずかしい(正解がないため)
- 個人情報がかせになることもある
- 個人情報は、学生にも、何の目的で使用するかを説明しておくことが大切である

★ シラバスについて

提出について

- 提出時期を考慮してほしい
- 変更期間を設けてほしい
- シラバスを固定すると、実情に合わせた変更ができない
- 履修の人数、教室、その他の環境によって変更が必要になる
- シラバス変更を学生に説明したり配布するなどの方法がある
- 変更を前提とした期間が設定されていると、より実情に合わせられる

活用について

- シラバスは活用されているのか？
- 学生も利用方法を知らない場合がある
- FYE で説明しているはずである
- 学生が関心を持っていない場合は、教員が説明しても理解していない
- シラバス作成時に学生を参加させている大学の例もある（関心を示す）

★ FD 活動について

活動について

- 学生も一緒に活動できるとよい（他大学では例がある）
- 日々の教育活動の中で実践するべきものである
- 非常勤教員も対象にするとよい
 - 学部によっては非常勤対象のプログラムもある
- 卒業生の意見も反映できるとよい
- 教員専用の FD のサイトがあるとよい
 - 授業のヒントを集める
 - 「Bb 活用術」など

IT 利用について

- Bb、UNITAMA、ノーツなど利用するソフトが多すぎるのでは？
(学生が使うものを統一してほしい)
- 携帯電話を授業につかう方法もある
- 学生によっては IT を苦手とするものもある

アンケートについて

- シラバスにかかわる項目を考えるべきである
- 学生のアンケート内容を精査するべきである
- 授業改善に結びつける項目にするべきである
- 一律に意見を聞くことに限界を感じる
- 毎年同じ項目でなく、別のテーマで聞くとよい
- 毎年同じだからこそ統計データが取れるメリットもある
- 雑音が多すぎて、本来の意見が聞けない

第3回 (2/17~18) (名簿順、敬称略)

宮崎真由、日臺滋之、フィリップ・ロウランド、佐藤一臣、神澤隆、太田拓紀
(計6名)

このクラスは、昨年までのディスカッションの内容を読んでから議論に入ったため、すでに解決済のことは言及せず、むしろ設備や機材の使い方など、具体的な授業改善についての問題が提出された。これらの改善策は、できることから始めるということである。

たとえば、当該研修会で使用するコメント用紙は、「英語版が必要」という希望があった。これに対して、研修会終了後、日臺、ロウランド両氏によって翻訳版が作成されて担当者に送られてきた。すぐに改善されたことに感謝するとともに、FD活動に対する教員各位の熱意を知ることができたことも、このディスカッションの成果だと感じる。

★授業運営のヒント

騒がしい学生への対応

- 怒ると逆効果になる
- 黙るほうが効果的だが、雰囲気が悪くなることがある
- 一人ではなく、おしゃべりしている二人を叱ることが大切
- おしゃべり解消に、クイズを入れて提出させる方法をとっている
 - クイズはいつ出すかは言わない
 - 緊張して話を聞く
- 居眠りは、おしゃべりよりはよいと思う

マナーが悪い学生への対応

- 帽子をかぶっている学生には、脱がせている
- 授業中の飲食は禁じている
- 携帯を使用している学生には「何を調べているのか？」と聞く（単語を調べていることもある）
- 無視せずにコミュニケーションを取る（注意したり聞いたりする）
- 食事を取っていない学生には、急いで食べる時間をあげている（出席取り終わるまでなど）

眠気防止の工夫

- 10分単位で作業をさせている（一斉 → ペア → グループ）
- 短いビデオを入れて眠気防止を図る
- ビデオの間、かえっておしゃべりが始まることもある（むずかしい）

★シラバスについて

- どの程度まで変更可能かがよく分からない
- 柔軟性がほしい
- 初回授業のときに、現状に合わせたシラバスを配布し、学生に確認している

★成績評価について

- クイズ（小テスト）の評価を重くすることで、授業の参画度が高くなる
- F評価にした学生の対応に時間と労力が費やされて、悩むことがある
- F評価が多い場合は、授業運営課にまかせたほうがよい
- 出席で評価できないが、実験の場合は全出席でないと無意味になる
- 出席では評価できないが、参画度では評価してよいはずである

★より良い授業運営のために

機材について

- 特定の機材でないと使えない場合がある（DVD など）
- 各館で、機材をどこで管理しているのか明確にしてほしい
- ワンストップ・サービスできるような環境整備をしてほしい

設備について

- 隣の教室のマイクが大きくて迷惑を被ることがある → 対処の仕方が不明
- 9号館は壁が薄いため、お互いに困る → 防音対策はできないのか？
- ソフトの整備など、有効利用できる環境がほしい

事務について

- 異動によって、スムーズな事務作業ができなくなる場合がある
- 適材適所の人材配置を望む

★FD活動について

必要な研修会

- 教員対象の IT 関連の演習コースがほしい
- 電子黒板など、効果な機材の有効利用法を教えてほしい

当該研修会

- 英語版のコメント用紙が必要である
→ 参加者の日臺、ロウランドの両氏によって英語版を作成

(6) 実施の成果

プレゼンテーション研修会の実施も8年を経て、大多数の専任教員が受講済みとなり、当該研修会はすでに玉川大学において定着してきた。フリーコメントやディスカッションからも分かるように、当該研修を通じて教員間に相互理解が深まり、FD活動への参画意欲の向上に寄与してきた。この間、改善への提案に結びつくような具体的な意見も多く出てきた。こうした具体的な提案は、大きな進歩と考えることができる。

また対外的にも知られることとなり、他大学からの問い合わせも来ている。どこの大学でも、FD研修会の実施は多くなってきたが、プレゼンテーション研修会をビデオまで使用して実践しているところは少なく、今後も注目される活動のひとつとなると思われる。

(7) 今後の課題

当該研修会は着実に成果を上げていると考えることができるが、FD活動全体を考えると、非常に小さい一歩を踏み出したに過ぎない。参加された先生方から、ディスカッションや休み時間の会話を通じて、多くの積極的な提案がなされている。これらの意見から今後の課題として取り上げらるべき事柄を洗い出して、ここに記載しておく。

a. 改善に結びつけるためには、次の段階の研修会が必要である

当該研修会の目的は、「プレゼンテーション技術の向上」ではない。それによって「授業改善」が行われ、さらに「教育の質向上に役立つ」ことが本来の目的である。そのためには当該研修会の実施だけではなく、次の段階の研修会を検討することが必要である。

まずは各学部、学科ごとに、講義内容だけでなく設備や環境を考慮した研修会が必要になる。学部によっては公開授業などを頻繁に実施しているようであるが、玉川大学全体として、こうした学部、学科に特化した研修会の実施が期待される。

b. 大学全体としての講義力を向上させるには、受講対象者を拡大する

当該研修会は、専任教員のみが対象である。しかし、学生にとっては常勤も非常勤も関係なく、「先生」である。今後は非常勤講師、特に講義形式が多い学科を担当する人に対しても、研修会を広げていく必要が出てくるのではないかと考える。

c. 研修会を継続するには担当者を拡大する必要がある

今後の展開を考えると、当該研修会の担当者を養成する必要がある。こうした研修会は属人的なものであってはいけない。特定の担当者しかできない研修会ではなく、誰もが担当できるプログラムにするべきである。誰が担当しようとも、また何年たとうとも必要なプログラムとして継続していくことに価値がある。実際、FD活動が盛んな大学でも、これだけ継続して1つのプログラムを実践している大学は少ない。

単発的なイベントに終わるFDではなく、地に足のついた本当に役立つFDの実績を残すためにも、10年、20年とこの研修会を継続する方策を検討することが大切だと感じている。そのためにも、人材確保の必要性を感じる。

(8) 平成 21 年度 大学FDプレゼンテーション研修会 参加者一覧

学部	学科	在職者数 (人)	平成 21 年度参加者氏名 (敬称略)			※ 累積数 (人)
			第 1 回	第 2 回	第 3 回	
文	人間学科	14	有源探 ^{ジェラード}		宮崎 真由	8
	比較文化学科	21	中嶋 真美		日臺 滋之 フィリップ・ロウランド ^ド	19
農	生物資源学科	15	宮田 徹			12
	生物環境システム学科	14		浅田 真一		11
	生命化学科	18			佐藤 一臣	13
工	機械情報システム学科	21				14
	ソフトウェアサイエンス学科	10				8
	マネジメントサイエンス学科	12	小林 直樹			7
	知能情報システム学科	2				2
	メディアネットワーク学科	2				2
経	国際経営学科	17				16
	観光経営学科	11			神澤 隆	8
教	教育学科	32			太田 拓紀	24
	乳幼児発達学科	11		宮崎 豊 岩田 恵子		8
芸	パフォーマンス・アーツ学科	15	馬場 眞二			11
	メディア・アーツ学科	12				8
	ビジュアル・アーツ学科	11				9
リ	リベラルアーツ学科	23	梶川 祥世	永井 悦子		21
計 (人)		261	6	4	6	201

※在職者数は助手以上で、平成 21 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

※累積数は当該学科の平成 21 年 5 月 1 日現在在職者の中で、平成 14～21 年度に研修を受講した専任教員の累積数。

2. 新任教員研修会

平成 22 年度採用の新任教員（助教以上）に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は平成 14 年度より開始されたもので、8 回目の開催となる。参加者 11 名で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 22 年 3 月 3 日（水）10:00～17:00、4 日（木）10:00～16:30

場 所：大学 9 号館 400 教室

対 象：平成 22 年度採用の助教以上の新任教員

研修目的：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・教育方針を理解する
・専任教員としての業務に必要な知識を得る

到達目標：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・方針を他者に説明することができる。

・専任教員としての業務を理解し、遂行することができる。

（1）研修プログラム内容

1 日目：3 月 3 日（水） 会場：大学 9 号館 400 教室

時 間	内 容	資料 No.	資 料	担 当
10:00	開 始／研修説明			人事部
10:05	開催にあたって			小原芳明理事長
10:25	新任教員紹介			人事部
10:40	講演「玉川学園の建学精神 － 全人教育と教育の 12 信条」	No.1		石橋哲成 理事・教育学部教授
12:00	昼 食			
13:00	キャンパスツアー	別途 配付	・玉川学園案内図	学士課程教育 センター、 人事部
14:20	教学事項に関する質疑応答 ・玉川学園の組織機構／玉川大学の概要 ・各種運営担当、担任業務、教務指導、 学生指導 ・年間授業計画 ・学則・規程等（授業、休講、試験、 成績等） ・教学事務手続要領（研究費、出張等）	No.2		教学部 教務課 授業運営課 学務課
15:20	茶話会			島川聖一郎理事
15:50	Notes システムと Notes 掲示板の活用 玉川大学の ICT を活用した教育	No.3		e エデュケーションセンター
16:55	質疑応答／翌日の予定説明			人事部
17:00	終 了			

2 日目：3 月 4 日（木） 会場：大学 9 号館 400 教室

時間	内容	資料 No.	資料	担当
10:00	研修説明			人事部
10:05	服務について	No.4		人事部
10:50	アカデミック・ポートフォリオについて 研究者情報システムについて	No.5		学士課程教育 センター 教学部教務課
11:10	玉川学園の個人情報保護方針について	No.6		教育環境 コンプライアンス室
11:40	キャンパス・カード用写真撮影			総務部
12:00	昼 食			
13:00	ワークショップ 「学士課程教育答申からみた 新しい授業運営について」	No.7		学士課程教育 センター 菊池重雄 副センター長
15:30	新任教員懇談会			大学FD委員会
16:20	質疑応答・まとめ			人事部
16:30	終 了			

<別途配付資料・参考資料>

- ・「First Year Experience」（学士課程教育センター）
- ・「環境問題と ISO 14001」（教育環境コンプライアンス室）
- ・個人情報保護マネジメントシステムガイドブック（教育環境コンプライアンス室）
- ・わかりやすい個人情報保護のしくみ（教育環境コンプライアンス室）
- ・「学校における生徒等に関する個人情報の適正な取扱いを確保するために事業者が構すべき措置に関する指針」解説（教育環境コンプライアンス室）
- ・玉川大学研究者情報管理システム操作手順書（教員用）（教学部）
- ・タマガワキャンパス Information 2009

<送付済み>

- ・小原國芳『全人教育論』玉川大学出版部
- ・玉川学園編『愛吟集』玉川学園出版部
- ・「図書館利用ガイド」
- ・「全人 2010 年 2 月号」玉川大学出版部
- ・玉川学園創立 80 周年記念誌『TAMAGAWA 80th Anniversary - そして未来へ』
- ・「TAMAGAWA 教職員ハンドブック」
- ・「玉川学園・玉川大学 Tamagawa K-12 & University」

(2) 実施の成果

今年度の新任教員研修会では、特に教学事項については事前に先生方に資料をお送りし、ごらんいただいた上で、当日に当該業務の担当者より近い距離で話を聞けるようにするなど工夫をした。また、2日目には授業運営のためのワークショップを加えた。

研修内容・資料・講師の説明については、参加者の全員が、「とても充実していた」、あるいは「充実していた」と回答している。

今回の研修のよかった点についてのコメントは、次のとおりである。

よかった点：

- ①大学教員生活は初めてなので、2日間詳細にガイダンスしていただきよかった。
- ②教育方針や事務手続きについて理解できたのと同時に、いろいろな方と話せてよかった。
- ③大学教員を今までやってきたが、内容的にいろいろな点を再確認できた。
- ④疑問に思っていたことが明白になった。
- ⑤同じ新任の先生とコミュニケーションがとれた。
- ⑥玉川の精神等に関する生の声を聞くことができた。身が引き締まった。
- ⑦授業を始める前に、現在求められている学士課程教育とその必要性について知ることができた。
- ⑧企業に勤務しているので、早い段階で大学用語に触れられた。
- ⑨質問に丁寧に答えてもらえた。
- ⑩誤解していたこと、知らなかったことを学習でき、多く感銘を受けた。

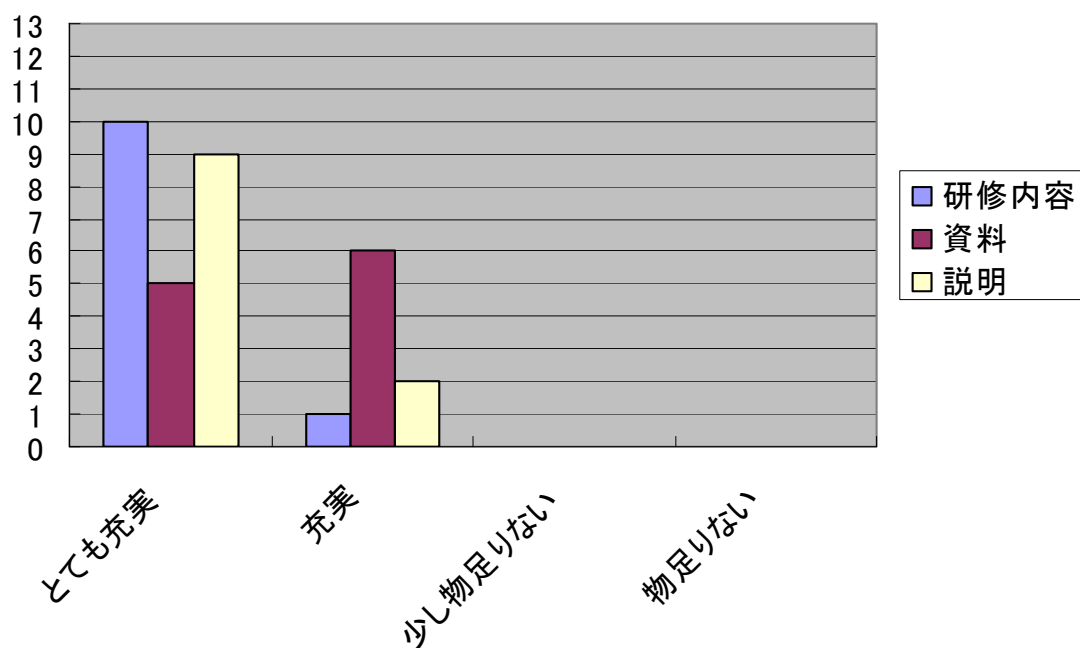
その上で、改善希望として、次のようなコメントをいただいた。

改善希望：

- ①研修開催の時期についてももう少し早い時期に知ることができるとよい。
- ②教学事項については、資料を事前に送っていただいたが、「質問事項を整理し、当日に備えるように」と注記いただけるとよい。
- ③教学事項に関する質疑応答の時間をもう少し増やしていただくとありがたい。
- ④学部配属と研究所配属によって説明を分けたほうがよいところ（特に事務手続き）があると思った。
- ⑤長い話を続けるのではなく、分割して話していただくと、もっと集中して聞くことができたと思う。
- ⑥比較的受身の内容が多かったなので、もう少し参加型の内容があればと感じた。
- ⑦図書館のツアーがあるとよい。
- ⑧時間を気にせず、じっくり説明をしたほうがよいかもしれない。

これらの意見から、本研修会の目的は達成できていると評価できる。次年度の開催に向け、さらなる研修内容や提示資料の工夫と向上に努めたい。

新任教員研修会アンケート調査結果



	研修内容	資料	説明
とても充実	10	5	9
充実	1	6	2
少し物足りない	0	0	0
物足りない	0	0	0

以上

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 工学部マネジメントサイエンス学科 根上 明 先生

環境エデュケーター育成に伴う環境保全委員会の活動における活用

根上先生は、体験学習や Neuro Linguistic Programming（神経言語プログラミング）を取り入れた人間関係教育、アドベンチャー教育、環境教育を専門分野にされています。本学においては、環境エデュケーター（指導者）を養成するためのプログラムである環境エデュケーター養成講座や環境エデュケーター・トレーニング講座を担当されています。環境エデュケーターの資格取得後の活動の場である「学生環境保全委員会」の多岐にわたる活動において、Blackboard@Tamagawa（以下 Bb）を学生への支援として有効活用されている事例を紹介いたします。



◆グループ名と実施規模：環境エデュケーター
（1期生 58名・2期生 53名・3期生 54名）

コミュニケーションツールとしての Bb

玉川大学学生環境保全委員会（Student Environmental Education Committee）は、環境エデュケーター養成講座・トレーニング講座を終了し、玉川独自の資格である環境エデュケーターの認定を受けた学生が所属しています。講座で学んだ知識を活かして実際に指導者として現場で教育活動や啓蒙活動を通して、人間の活動が環境に与える影響を捉え、そのことから気付いたこと、学んだことを地球環境の維持や向上のために実践できる玉川っ子を育成しています。委員会の活動は、全7学部のさまざまな専門分野を学んでいる学生がその特徴を出し合いながら主体的・自主的に運営されています。実際の活動は週2回の全体活動日を中心に、年間を通して行っています。ただし、

学生は授業、クラブ活動やアルバイトなどの諸事情によって、全ての活動に全員が等しい頻度で関わることができません。関わる頻度によって情報や気持ちの共有が妨げられミスコミュニケーションが生じます。その結果チームとしてのモチベーション低下をもたらすこととなります。そこで、異なる学部のそして参加頻度の異なる学生のコミュニケーションをサポートする方法として、BbのMyグループを利用することを考えました。

Bbの設計図（委員会の活動全体を知るための工夫）

グループ内の登録者を、さらに、目的別にグループ化して管理し、年間の主な活動スケジュール一覧、主な活動イベント、活動の記録、各種書類など重要かつ必ず共有しておきたい情報を、下記のイメージで設計しました。

スケジュール

「活動予定・活動実績」

毎年度末に次年度に実施する主な活動の計画を立て、その活動を活動予定一覧として掲載しています。(予定外活動に関してはその都度書き加えていきます) また、実施済の活動は活動実績に移動することによって、最新の活動予定が分かりやすくなっています。

活動イベント

「NHKエコパーク」「併設校環境学習支援」「コスモス祭」「全国大学生環境活動コンテスト」「お出前子ども環境講座」

年間計画で予定された活動の進捗状況がわかるようにそれぞれのイベントごとにBOXを設けています。たとえばコスモス祭であれば、春の実務者会議に始まり、各回の会議の内容、当日の記録、ふりかえり会の記録、報告書などをいつでも読めるように担当者が責任を持って最新の内容を更新していきます。

記録

「活動の記録」「役員会の記録」

週2回の全体活動日はもちろん、その他の日に活動が行われた場合も、活動に参加したメンバーと、内容を参加者が持ち回りで記録し、最新版を常にアップしています。

書類

「規約」「手引き」「申請書」「企画書」「報告書」
委員会活動に必要な書類を保存します。



図1 グループの管理

ファイルの交換・グループディスカッション・eメール

グループの登録者を調整することで、活動予定・活動実績などのように委員全員が共有する必要があるものと、主に学生役員だけが関わる必要があるものとを区別することができます。さらに、グループディスカッションを活用する

ことで、各イベントごとで起こる疑問点や意見をグループメンバーと交換できます。委員全体への連絡や報告などは、グループメールを活用しています。



図2 ディスカッションボード (BBS)

受け身から転じて、能動的かわりを生む

Bbを使い始めたころに比べ、その使い方は変化しています。それは使い方などの外面的変化ではなく、学生一人ひとりの内面的変化です。たとえば議事録を執ることを見ても、当初は書記係を指名しなければならなかったのですが、最近はず誰かが自らすすんで書記係を担当するようになりました。また以前は情報を受信することが多かった学生が、主体的に情報を発信するようになりました。

環境エデュケーターとして体験したさまざまな現場や活動を「見える化」「読める化」したことにより、その活動を体験できなかったメンバーが情報を共有できるようになりました。そのことを通して、「当事者意識」が委員会全体に確実に育ってきている実感があります。

おわりに

学生たちは活動やイベントの参加・不参加など、その反応に即時性を伴う場合などは、Bbと携帯を使い分け、その双方の長所をうまく活用しているように思われます。このような使い方の双方向性やスピードが改善されると、使い勝手の幅が広がるのではないかと感じます。

既存の状態に満足するのではなく、目的を達成するために、今あるものをうまく活用していくという学生たちのエネルギーに感心しています。

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 教育学部教育学科助教：大谷 千恵 先生

「一年次セミナー」における Blackboard の活用について

大谷先生は、異文化間教育（国際理解教育）や国際理解／異文化理解を目的とした英語教育を専門分野にされています。多様な人々と新しい価値観を創っていくための道具として英語を捉え、多文化共生に対応できる教員養成にも取り組まれています。教育学部において、英語リテラシー演習・異文化理解と教育・児童英語コミュニケーション、総合演習、1年次セミナー101等を担当されています。今回は、入学後の基礎学力の形成などアカデミック・スキルを習得するコア科目「1年次セミナー101」において、レポートの構成や分析などの読解力、文章力、コミュニケーション能力の養成などに Blackboard@Tamagawa(以下、Bb)を活用されている事例を紹介させていただきます。



科目の実施規模と Blackboard の活用

◆科目名：一年次セミナー 101・102（1年生 36名）

◆授業の概要：大学生活を充実させていく上で必要なアカデミック・スキルの習得と、4年間の大学生活を通して描いていく「キャリアデザイン」に必要な基礎力を身につけていくことを目的とした授業で、コア科目の全人教育・FYE科目群に必修科目として設置されている。

すでに、多くの先生方が様々な Bb の活用例を紹介されているので、ここでは「一年次セミナー101・102」での試みとして、ディスカッション・ボードを活用した「レポート課題」と「夏の読書課題」に焦点を絞ってご紹介します。

レポート課題

多くの大学授業は1セメスターで完結する構

造になっていますが、「一年次セミナー」は春学期・秋学期を通して指導していけるユニークな科目です。アカデミック・スキルを身につけることを大きな目的としている「1年次セミナー」ですので、批判的に考える力(critical thinking skill)を習得していくことは非常に重要です。そこで、Bb上に「レポート課題」メニューをつくり、春学期のレポート課題について賛成／反対の立場を選んだ上で、自分の主張と根拠を投稿するとともに、自分以外の5人にコメント／質問／反論する場を設けてみました。

メリットは、根拠の乏しい議論を目に見える形で記録に残せるので、早い段階で問題点を指摘・指導できることです。教室でのディスカッションでは、全員の意見を細かく見ることはできませんし、目立つ学生達が意見を出すと「良いディスカッションができています」と錯覚する学生も少なくありません。意見を出し合えるこ

とは大切なことですが、大学生に求められるのはディスカッションの中身です。信頼性・妥当性の高い調査や実験に基づいたデータや理論、専門家の意見を根拠として議論・論述できるようになることが求められるのです。実際に、Bb上の「レポート課題」で指導を受けた学生達の方が、それ以前の学生達よりも、より具体的な根拠を挙げたレポートを書くようになっていきます。



図1 BBS「レポート課題」

夏の読書課題

次に「夏の読書課題」についてご紹介します。本は、前述したアカデミック・スキルに欠かせないリソースです。「大学生らしくたくさんの本を読んでもらいたい！」という思いから、他の授業では手を出さないのでできない「夏期休暇」に眼をつけ、夏の読書課題を出しました。学生達も「大学生なら、本くらい読まなくては」という思いがあったようで、「どういう本を読んだらいいんですか?」、「本を読むのが苦手なのですが、どうしたら好きになれますか?」、「本屋でたくさん並べてある本が良い本なんです

か?」といった質問がいくつもありました。そこで、どんな本をクラスメイトが読み、どんなことを感じ・考えたのか、互いに閲覧できる「夏の読書課題」メニューをつくりました。

具体的には、夏休み中に、社会関連、教育関連、子ども関連のいずれかの分野の本を最低2冊以上読み(2冊は「あとがき」を入れて200ページ以上のもの、3冊目からは自由)、読み終わったら、①その本の情報(著者名、本のタイトル、出版社、出版年)、②要約、③感想、④(本年度より)お勧め度(☆印5個で評価)をBbの「夏の読書課題」に投稿します。

学生にとってのメリットは、各自が読み終わりたい投稿できるので、クラスメイトの勧めていた本を次の1冊に選ぶことができます。また、クラスメイトがどのような本を読み、どのようなことに疑問を持ち、どのようなことを考え、気づいたのか互いに閲覧できることは、大きな刺激となるようです。教員のメリットは、「夏の読書課題」の成果を出発点に秋学期の授業準備ができることです。

このように、学生達の学びを、秋学期の授業に繋げていくことを目的に、Bb活用の試行錯誤を重ねています。



図2 BBS「夏の読書課題」

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 脳科学研究所准教授：松元 健二 先生

コア科目「脳の科学」で、問題意識の喚起に活用

松元先生は、神経科学一般を専門分野にされています。「目標指向行動」「意思決定」「動機づけの脳内機構」などをはじめとして、日々の私たちの行動における様々な動機から意思決定、行動へと結びつける脳内メカニズムを最新の脳機能イメージング技術を用いて明らかにしていく研究活動などに取り組まれています。

また、教育活動においては、コア科目「脳の科学」、「意思決定システム特論」、「生理心理学」、「脳科学と社会」などを担当されています。

脳の科学的理解を促すために、脳の働きについての問題意識を高めることができるように Blackboard @ Tamagawa (以下 Bb) を有効活用されている事例を紹介いただきます。



科目の実施規模と講義での Bb の活用

- ◆ 科目名: 脳の科学(コア科目 受講者約 92 名)
- ◆ 授業概要: 脳トレやアハ体験という言葉に象徴される脳ブームが訪れるはるか以前から、玉川大学では脳科学研究が地道に続けられてきましたが、そのような伝統に根ざした本物の脳科学を、学生に分かりやすく伝える科目が、自然科学科目群コア科目の「脳の科学」です。脳科学研究所の専任教員 5 名がこの授業を担っており、それぞれ 90 名程度の受講者がいます。私が担当する授業では、「脳の各部分が持つ特有の機能、および部分間の関係についてのイメージを獲得する」ことを到達目標として、感覚機能、運動機能そして高次機能のそれぞれについて、数回ずつの授業を行っています。脳内の構造の名称を覚えてもらうことには重点をおかず、脳は何をできて、それをどのように実現しているのか、そのリアリティを湧かすことに重点を置いています。

授業前アンケートの実施

脳という器官は、私たち一人ひとりが持っていますから、その脳全体の働きについては、自分自身の心の働きとして誰もがリアルに感じています。しかしこれがどのような要素的な働きがどのように統合されているのかということになると、脳の科学的な理解抜きには、途方にくれてしまうわけです。脳の科学的な理解を促すためには、正しく脳の機能を分解して、要素毎に適切に問題意識を喚起することが早道です。この要素毎の問題意識の喚起のために、Bb のアンケートを利用しています。毎回の授業の 2-3 日前には、Bb 上にアンケートをアップしておきます。例えば、聴覚についての授業の前には、「音が聞こえなかったら困ること、聞こえるとよいことについて、考えてお答え下さい」というアンケートを実施します。そして、授業当日には、集まったアンケート回答すべて目を通します。誰にも共通する回答がたくさん出て

くる一方で、一人ひとりの個性が強く反映された回答も結構出てきます。読む方も楽しく読め、逆に教えられたりもします。アンケート結果の中からキーワードや特に面白い回答にはマークをつけておき、これを授業の最初に見せながら、講評していきます。ときどきはその回答からさらに膨らませて、解説や私自身の考えを少し加えたりもします。このようにして、受講者が授業にコミットしていることを自覚して貰い、その上で、通常の授業に入ります。

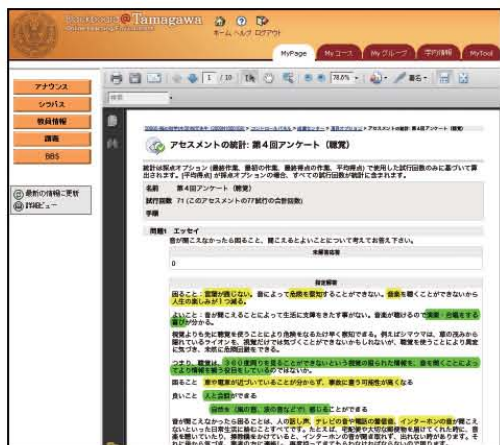


図1. アンケート結果

なお、受講者がアンケートに答えてくれなかったらこのようなアンケートの利用は成り立ちませんので、必ずこのアンケートに答えてから授業に臨んで貰うように全受講者に、予め働きかけておきます。これには、最初の授業の前に、Bb上の「アナウンス」および「すべての受講者ユーザー」への「eメールの送信」を利用しました。この際、「アンケートに答えたかどうか」は、成績に反映させることを受講者にも明言します。



図2. 受講者へeメール送信

しかし、アンケートそのものは、自分自身で考えて、本当に思うところを答えて欲しいので、「回答の中身は成績に反映させない」とし、そのことも受講者には明言しています。実際、各受講者のアンケート回答の有無、および全回答一覧は、「成績センター」から確認できますが、それぞれの回答が誰の回答なのかは、教員側にも分からなくなっています。ただ、自分の回答であることをアピールしたい人もいるかもしれませんが、敢えて名前等を回答に含めることも歓迎しています。



図3. 回答者の確認と回答一覧

授業用 ppt ファイルの保存

授業自体は、パワーポイントによるプレゼンテーションを毎回行っています。脳の科学はどうしても、脳の図など、図が多くなってきますので、これをいちいち板書していると、それだけで時間を浪費してしまうからです。受講者側としても、図をノートに写したりしては、そればかりに労力が取られ、肝心の脳の働きをイメージすることが疎かになってしまいますので、授業のファイルは、予めBbのコンテンツ領域にアップロードしておき、授業にはそれをプリントアウトしたものを持ってこられるようにしています。パワーポイントのファイルは画像を多く含めると、かなりのファイルサイズになるので、これをいつでも学生がダウンロードできるように置いておけるBbシステムは、非常に有用だと思います。

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 文学部比較文化学科非常勤講師：狩俣恵美先生

英語のコミュニケーションの強化を目的とした活用

狩俣先生は、英語・英米文学を専門分野に、芸術学部や工学部の英語コミュニケーション・English Communication III・Listening Skills・総合英語Ⅰ～Ⅲなどを担当されています。Blackboard@Tamagawa（以下Bb）のコースでは、アナウンス、講義資料や音声・動画教材の掲載、課題提出や評価結果のフィードバックなど様々な機能を活用されています。

今回は、授業中は学生に積極的に英語で会話をさせコミュニケーションを図ることに集中させることを目的に、授業時間外の学習としてBbを有効活用をされている事例を紹介いただきます。



科目の実施規模と講義でのBbの活用

◆科目名：英語コミュニケーション

（工学部2年生27名・芸術学部1年生18名）

◆授業概要：これまでに養ってきた英語力を基礎として、テキストやスピーキング練習を通して自分の言いたい事を十分に表現できるよう実践を重視し、異文化の慣習やマナーなどを理解しながら、それに沿った表現方法を習得する。授業時間外の学習として、Bbに講義資料を掲載したり、課題提出を行うなど、定期的なアクセスを学生に促している。

英語コミュニケーションについて

この科目は英語でのコミュニケーション能力を伸ばす事を目的としており、リスニング・スピーキング中心の演習を行っています。実践を重視し、授業ではテキストのトピックを中心に学生同士の会話練習やロールプレイや様々な形式のスピーキングテスト（講師と一対一で行うインタビュー、スピーチ、ペアやグループによ

るディスカッション等）、学期末に行うグループ・パフォーマンスなどを通して、英語で十分に自己表現できるように訓練します。

リスニングに関しては、テキスト付属のCDや映画などのビデオ教材を使用した演習を行って、本物の英語に慣れ親しむようにしていますが、会話練習と比較すると発話が少なく受け身な活動になりがちのため、授業内で割く時間を極力抑え、Bb上に課題を載せて提出させる事により、授業外での自習を促し、聴く力を強化しています。

具体的な機能の活用

主に利用しているBbの機能はアナウンス、音声・動画ファイルを含む教材や資料の掲載、課題提出です。コースメニューは学生に分かり易いように細かく分け、名称もコース仕様に変更し設定しています。（「ガイドライン」「課題」「音声」「スクリプト」等）アナウンスは毎週更新して授業内容や課題についての連絡事項を

掲載し、特に課題の提出と受領をスムーズに行えるように積極的に活用しています。



図1. メニューボタン

課題提出では、表示期間を設定し、提出を一回のみに限定することにより緊張感が生じ、提出率が上がります。また Bb は、提出された課題の評価結果をフィードバックする機能があります。この授業では、ヒアリングをして、英語の穴埋めと日本語訳を書くという課題が多いのですが、個別に間違っている部分を指摘することが出来ます。課題提出は週に1度行っています。提出された課題へのフィードバックは早急に行うよう心掛けています。

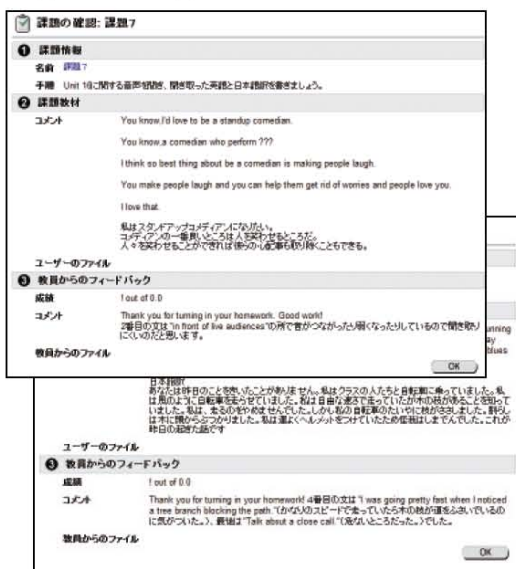


図2. フィードバック

Bb を活用するメリット

まずは、授業時間の有効利用です。限られた授業時間の中で、連絡事項の伝達や課題の説明を行う時間と労力を省くことができます。さらにアナウンスを一斉メールで配信することにより、より確実に学生に周知させることができま

す。

次に、教材配布の容易さがあります。課題プリントや資料を簡単に掲載することができ、音声教材でヒアリングの練習をさせることもできます。学生は授業内では難しかった音声教材の反復練習が可能となり、自分のペースで課題に取り組むことができます。

さらに、学生とのコミュニケーションの促進、意欲・習熟度の把握についてですが、「成績センター」や「パフォーマンスダッシュボード」から学生の最終アクセス日などを確認して、授業に対する積極性をチェックし、平常点に反映させることも可能です。

何よりも、課題やメールのやり取りを通して、学生一人一人と授業外で対話を続ける事が、結果的に、授業運営や学習環境に良い効果をもたらしていると実感しています。

氏名(ローマ字)	氏名(漢字)	ユーザー名	担当	最終コースアクセス日時	最終コースアクセスからの日数	レビュー	通知
KARIMATA Emi	狩俣 恵美	karimata	教員	2009/12/07 13:08:33	2	0	0
			受講生	2009/12/06 8:34:38	4	0	0
			受講生	2009/12/07 3:00:39	3	0	0
			受講生	2009/12/07 0:03:50	3	0	0
			受講生	2009/12/04 21:54:11	5	0	0
			受講生	2009/10/25 16:01:34	45	0	0
			受講生	2009/12/07 21:46:13	2	0	0
			受講生	2009/12/06 17:57:03	3	0	0
			受講生	2009/12/06 23:34:09	3	0	0
			受講生	2009/12/06 0:31:51	2	0	0
			受講生	2009/12/06 21:50:08	3	0	0
			受講生	2009/12/07 0:31:50	3	0	0

図3. パフォーマンスダッシュボード

今後に向けて

リスニング教材の開発にあたっては、ビデオ素材を用いることが多く、学生からの要望もあり、動画教材をより頻繁に取り入れたいと常々感じています。学生のグループ・パフォーマンスをビデオ撮りした動画を載せる事はありますが、自作でないものに関しては、著作権の問題があるためなかなか踏み切れない部分があります。著作権フリーの素材を使用する、表示期間を短く設定するなどの他、今後も良い方法を模索していきたいと思います。また、科目の種類や学生の英語力に応じてグループやディスカッション機能を活用する事も検討中です。

Ⅲ コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

前年度同様、今年度も春・秋学期においてそれぞれ最終授業にて実施した（一部、科目担当者の都合等により補講・試験期間中に実施）。対象科目はコア科目の全科目（実験・実技科目を除く）であるが、学期により対象科目群を限定している。

春学期：全人教育・FYE 科目群、自然科学科目群、生活関連・総合科目群

秋学期：全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、社会文化科目群

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝125名／136名（91.9%）

秋学期＝133名／143名（93.0%）

実施開講クラス数：春学期＝194クラス／214クラス（90.7%）

秋学期＝207クラス／223クラス（92.8%）

回答学生数：春学期＝8,976名／11,196名（80.1%）

秋学期＝6,739名／8,293名（81.3%）

(2) 実施時期

春学期：7月20日（月）～7月24日（金）

秋学期：1月18日（月）～1月22日（金）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がクラスでマークシート用紙を配布、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.72 参照）

2. 集計結果及び公表（p.51～62 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

コア科目群（全体）、全人教育論、全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、言語表現科目群（英語）、言語表現科目群（英語以外の語学）、社会文化科目群、自然科学科目群、生活関連・総合科目群
--

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者へのみフィードバックし、上記9分類についてはその平均値を学内のみを対象にホームページで公表している。

平成21年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

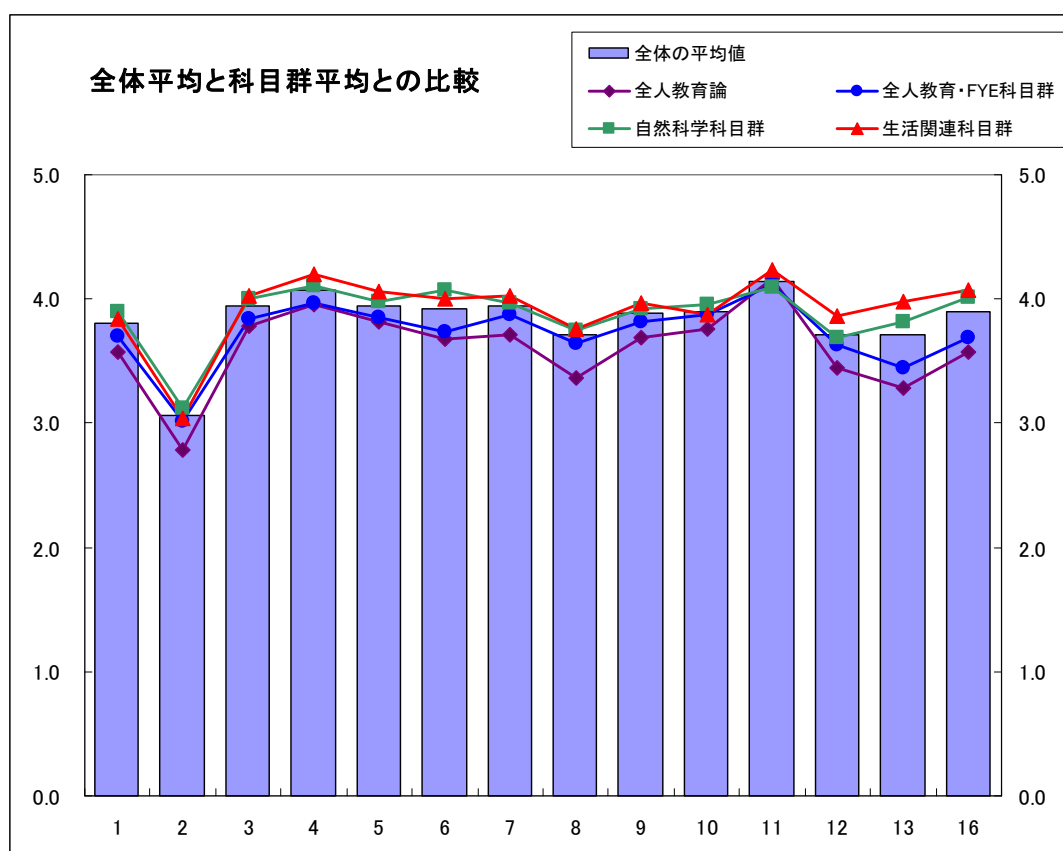
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 8976

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	24.1%	41.5%	26.6%	6.2%	1.5%	14
	2 授業以外によく予習復習した	3.1	9.8%	22.9%	39.2%	19.5%	8.6%	24
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	32.5%	38.0%	22.8%	5.1%	1.7%	27
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	38.9%	35.3%	20.8%	3.7%	1.3%	14
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	33.6%	34.8%	26.0%	3.8%	1.7%	43
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	34.9%	32.7%	24.0%	6.1%	2.2%	57
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	38.8%	30.0%	21.3%	6.8%	3.1%	29
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.7	28.6%	29.1%	30.2%	8.6%	3.5%	23
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	33.1%	32.8%	26.5%	5.5%	2.2%	26
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	33.3%	33.2%	25.9%	5.5%	2.0%	30
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	44.2%	31.2%	20.3%	3.0%	1.3%	23
	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	24.7%	35.9%	28.1%	8.2%	3.1%	63
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.7	28.8%	31.1%	26.5%	9.0%	4.6%	75

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.9	36.8%	29.3%	24.5%	5.7%	3.7%	972



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

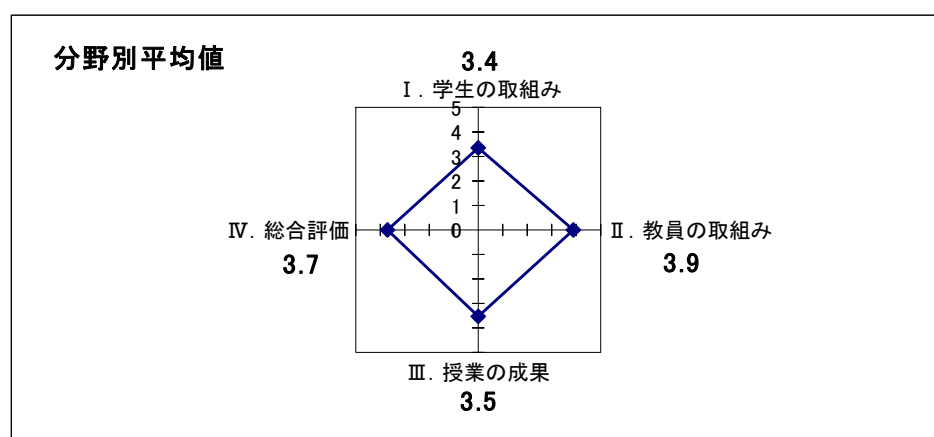
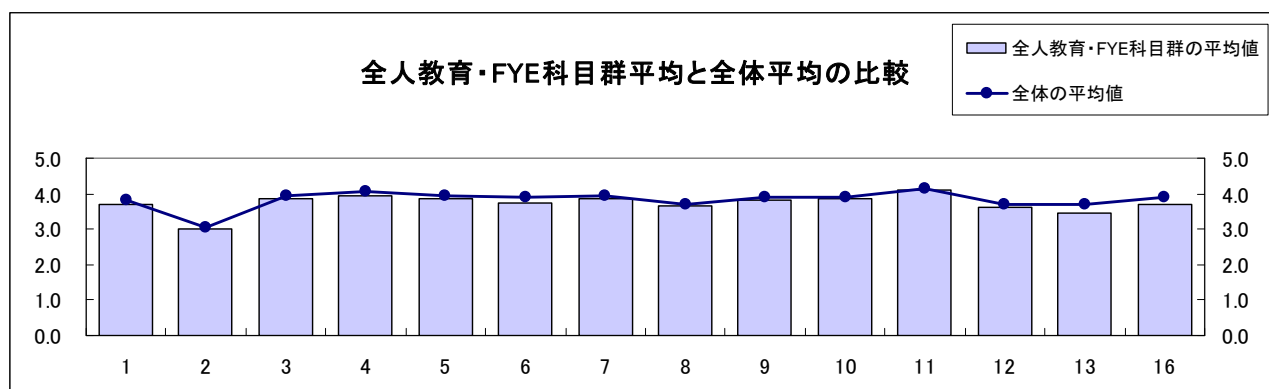
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

回答数(全体): 3604

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	19.3%	42.4%	29.3%	7.0%	2.0%	5
	2 授業以外によく予習復習した	3.0	9.1%	23.0%	38.1%	20.0%	9.9%	5
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.8	26.5%	39.9%	26.6%	5.3%	1.8%	9
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	33.3%	36.5%	24.8%	3.8%	1.6%	7
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	29.2%	35.7%	28.4%	4.5%	2.1%	19
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.7	26.1%	34.1%	29.4%	7.5%	2.8%	14
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	36.4%	30.4%	22.3%	6.7%	4.2%	10
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.6	25.7%	29.1%	32.6%	8.8%	3.8%	9
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.8	29.7%	33.1%	29.1%	5.7%	2.5%	7
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	30.8%	34.6%	27.4%	5.6%	1.7%	5
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	42.8%	32.0%	21.3%	2.6%	1.3%	11
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.6	19.8%	37.4%	31.6%	8.0%	3.1%
13 授業の内容に興味をもてた		3.4	18.5%	30.7%	33.3%	11.4%	6.1%	34

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.7	27.5%	29.6%	32.0%	6.3%	4.7%	356



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

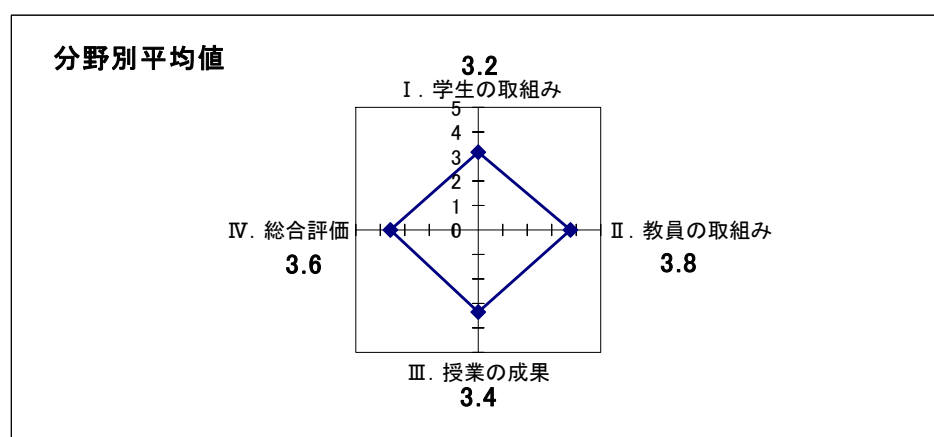
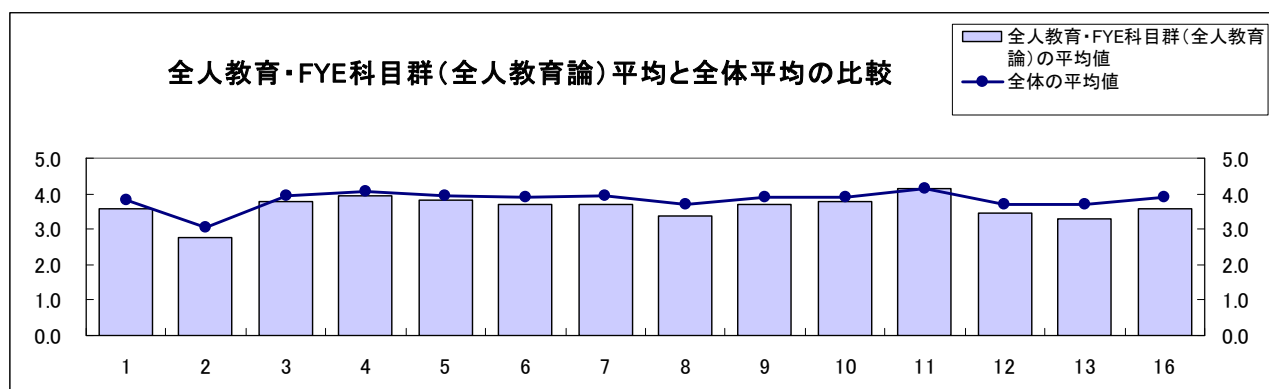
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

回答数(全体): 1863

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.6	15.5%	41.3%	30.8%	9.5%	2.8%	3
	2 授業以外によく予習復習した	2.8	6.4%	18.3%	36.7%	24.3%	14.2%	3
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.8	24.5%	40.1%	26.6%	6.5%	2.4%	4
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	34.6%	34.6%	24.5%	4.4%	1.9%	2
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.8	26.9%	35.9%	30.7%	4.5%	1.9%	14
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.7	25.8%	32.7%	29.1%	8.7%	3.7%	5
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.7	32.5%	27.7%	24.0%	9.5%	6.3%	4
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.4	18.2%	24.7%	38.2%	13.1%	5.7%	6
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.7	25.7%	31.7%	31.3%	7.9%	3.4%	4
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.8	27.0%	34.3%	28.9%	7.6%	2.2%	4
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	45.8%	30.4%	19.7%	2.6%	1.4%	4
	12 授業全体についてよく理解できた	3.4	14.2%	35.4%	35.7%	10.3%	4.4%	13
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.3	15.4%	28.5%	33.5%	14.8%	7.9%	17

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.6	23.5%	29.2%	34.2%	7.6%	5.5%	108



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

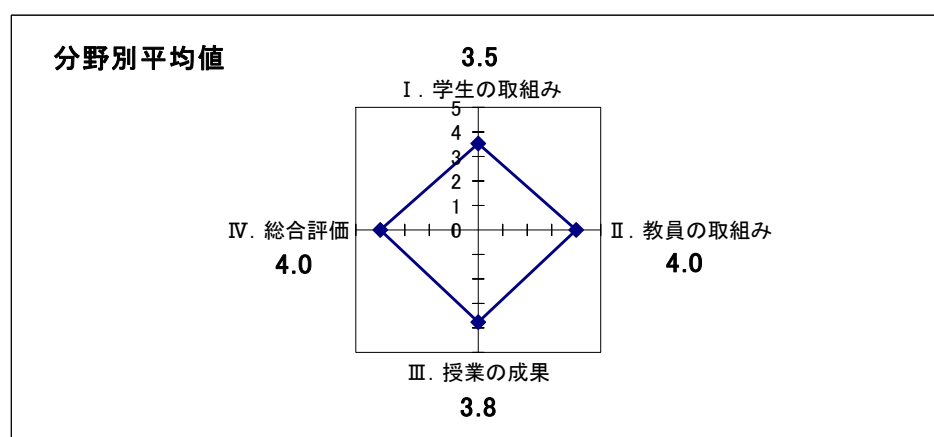
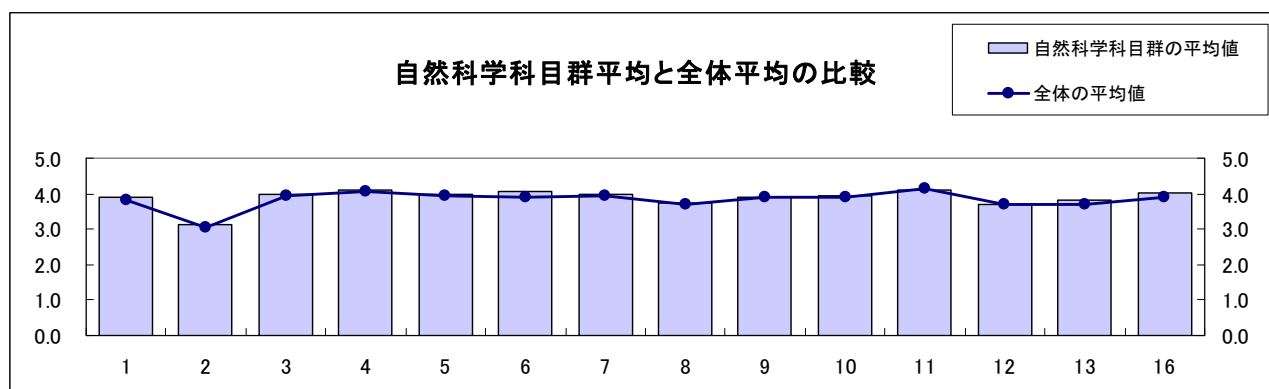
玉川大学

コア科目 自然科学科目群

回答数(全体): 3192

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	28.6%	40.4%	24.6%	5.2%	1.2%	7
	2 授業以外によく予習復習した	3.1	10.4%	23.4%	40.5%	19.0%	6.7%	10
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	35.8%	36.6%	21.1%	4.6%	1.8%	9
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	40.9%	34.5%	19.9%	3.6%	1.2%	7
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	34.2%	35.2%	26.5%	2.9%	1.3%	9
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.1	42.2%	31.3%	20.1%	4.7%	1.7%	11
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	38.9%	30.8%	21.0%	6.8%	2.5%	12
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	29.3%	30.4%	29.6%	7.6%	3.0%	7
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	33.6%	33.6%	25.8%	5.2%	1.8%	14
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	36.2%	32.5%	24.0%	5.1%	2.3%	11
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	41.8%	32.0%	21.4%	3.4%	1.4%	9
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	24.9%	35.2%	27.3%	9.0%	3.6%
13 授業の内容に興味をもてた		3.8	32.5%	32.2%	23.8%	7.5%	4.0%	26

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	41.5%	30.3%	19.9%	5.1%	3.1%	404



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

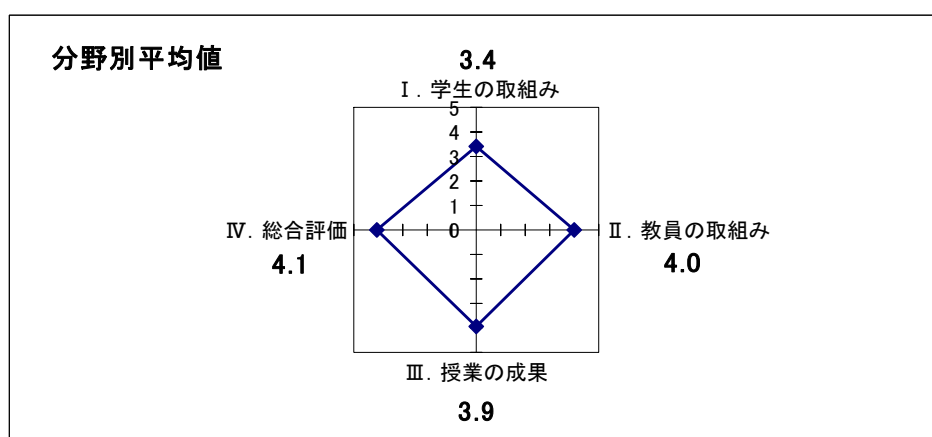
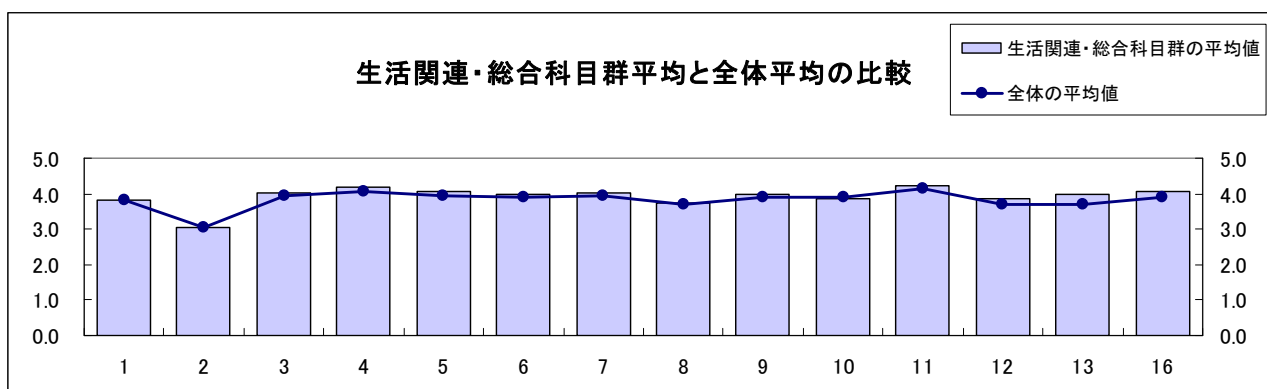
玉川大学

コア科目 生活関連・総合科目群

回答数(全体): 2180

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	25.3%	41.8%	25.3%	6.4%	1.2%	2
	2 授業以外によく予習復習した	3.0	10.0%	22.2%	39.1%	19.4%	9.3%	9
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	37.3%	36.8%	19.2%	5.3%	1.4%	9
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	45.4%	34.5%	15.3%	3.8%	1.0%	0
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.1	40.1%	32.9%	21.4%	3.9%	1.6%	15
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	38.8%	32.5%	20.9%	5.8%	2.0%	32
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	42.8%	28.3%	20.1%	6.8%	2.0%	7
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	32.6%	27.0%	27.2%	9.4%	3.7%	7
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	37.9%	31.1%	23.1%	5.7%	2.2%	5
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	33.1%	32.1%	26.3%	6.2%	2.3%	14
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	50.1%	28.6%	17.0%	3.1%	1.1%	3
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	32.3%	34.1%	23.6%	7.4%	2.6%
13 授業の内容に興味をもてた		4.0	40.5%	30.3%	19.0%	7.3%	3.0%	15

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	45.6%	27.5%	18.6%	5.5%	2.8%	212



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

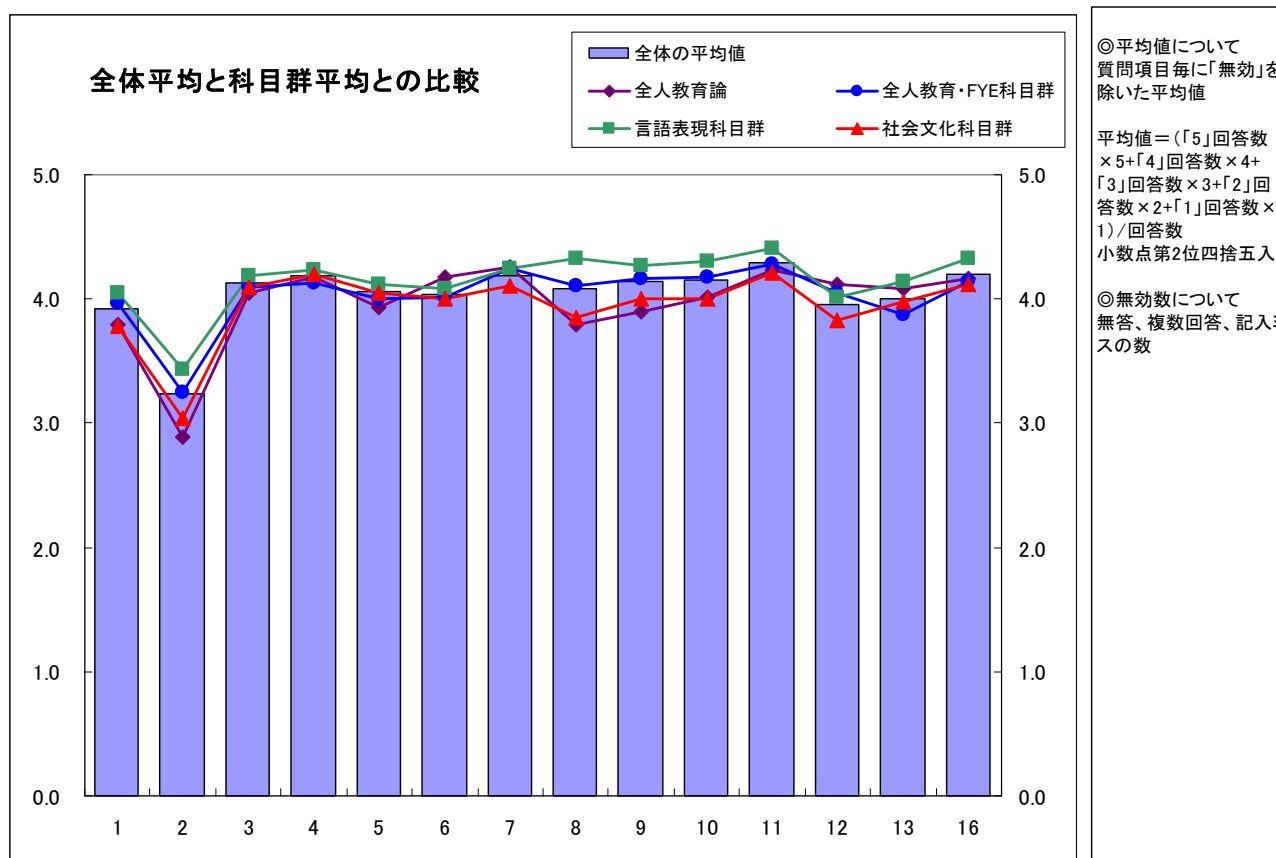
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 6739

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	26.1%	45.5%	23.6%	3.9%	0.8%	9
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	12.6%	25.7%	39.5%	16.7%	5.5%	8
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	39.4%	38.4%	18.7%	2.9%	0.7%	15
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	43.6%	35.6%	17.9%	2.4%	0.5%	13
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.1	37.9%	34.7%	23.4%	3.2%	0.7%	25
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	37.5%	34.3%	23.0%	4.3%	0.9%	11
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.2	48.2%	29.8%	16.5%	3.9%	1.5%	12
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.1	42.8%	30.4%	21.0%	4.5%	1.2%	10
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1	42.5%	33.6%	20.1%	2.9%	0.9%	11
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	43.6%	33.0%	19.5%	3.1%	0.9%	14
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	51.3%	30.1%	16.1%	2.0%	0.6%	12
	12 授業全体についてよく理解できた	4.0	32.1%	39.0%	22.8%	4.4%	1.6%	41
13 授業の内容に興味をもてた	4.0	38.8%	32.5%	21.7%	4.9%	2.2%	54	

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	47.9%	29.8%	17.7%	3.2%	1.4%	664



平成21年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

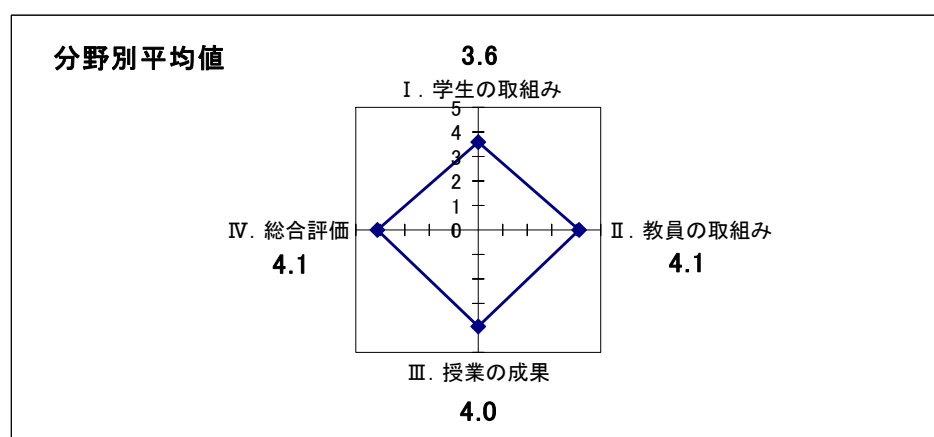
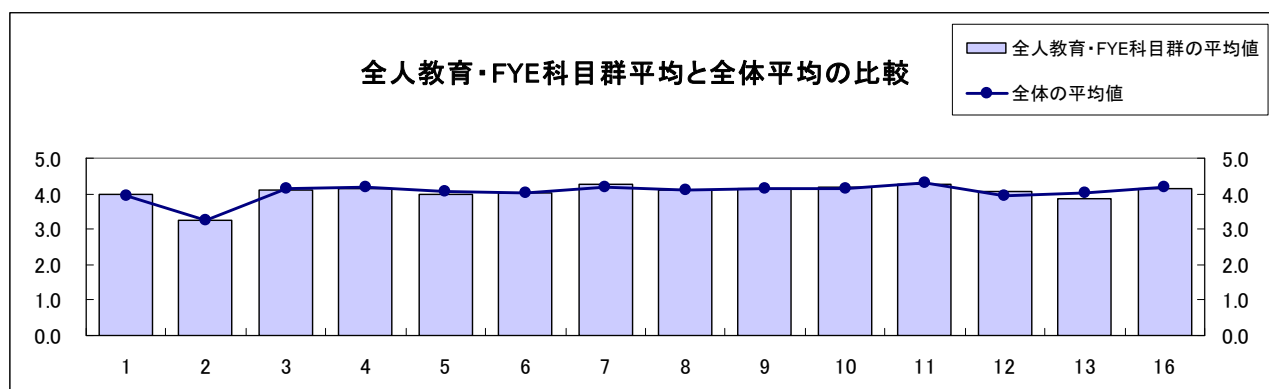
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

回答数(全体): 1779

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.0	28.7%	44.1%	23.0%	3.5%	0.6%	0
	2 授業以外によく予習復習した	3.3	14.0%	25.2%	38.7%	16.2%	5.8%	0
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	37.8%	38.6%	19.9%	2.9%	0.8%	2
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	41.0%	35.0%	20.8%	2.6%	0.6%	1
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	37.4%	32.1%	24.5%	5.0%	1.1%	4
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	36.1%	35.1%	23.2%	4.9%	0.7%	0
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.2	51.8%	27.3%	16.4%	3.0%	1.5%	2
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.1	42.0%	32.3%	21.3%	3.3%	1.1%	1
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.2	43.4%	33.6%	19.6%	2.8%	0.6%	1
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	44.0%	33.4%	19.2%	2.9%	0.6%	2
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	50.7%	28.9%	18.0%	1.9%	0.4%	0
III	12 授業全体についてよく理解できた	4.0	35.1%	39.9%	20.8%	3.0%	1.1%	8
	13 授業の内容に興味をもてた	3.9	31.6%	33.8%	27.0%	5.1%	2.5%	11

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	46.3%	28.5%	19.8%	3.3%	2.1%	42



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

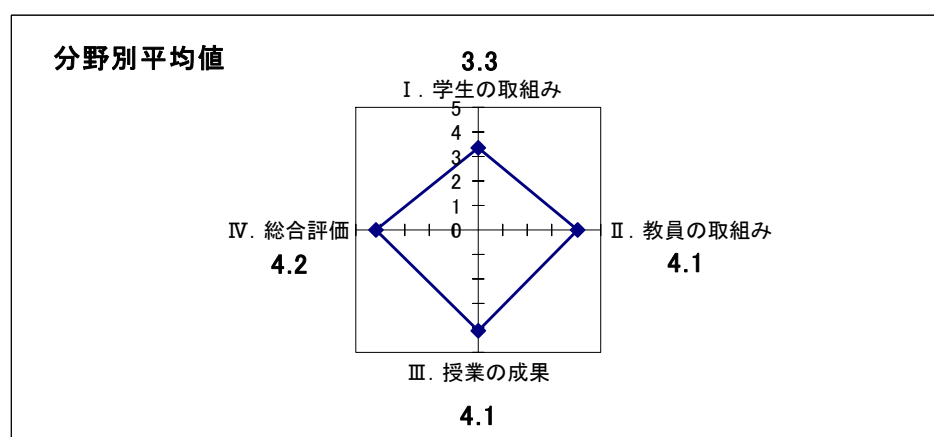
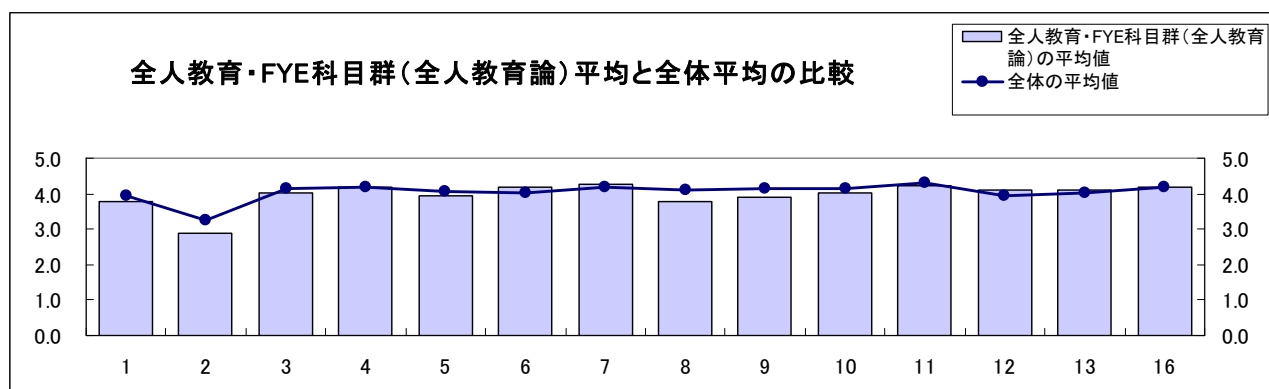
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

回答数(全体): 69

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	21.7%	43.5%	29.0%	4.3%	1.4%	0
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	7.2%	17.4%	44.9%	17.4%	13.0%	0
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	33.8%	42.6%	19.1%	2.9%	1.5%	1
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	40.6%	40.6%	15.9%	1.4%	1.4%	0
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	29.0%	39.1%	29.0%	1.4%	1.4%	0
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.2	37.7%	46.4%	13.0%	1.4%	1.4%	0
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.3	47.8%	34.8%	14.5%	1.4%	1.4%	0
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	27.5%	33.3%	31.9%	5.8%	1.4%	0
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	33.3%	29.0%	33.3%	2.9%	1.4%	0
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	37.7%	33.3%	23.2%	4.3%	1.4%	0
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	47.8%	33.3%	14.5%	2.9%	1.4%	0
	III	12 授業全体についてよく理解できた	4.1	43.5%	29.0%	24.6%	1.4%	1.4%
13 授業の内容に興味をもてた		4.1	39.1%	34.8%	23.2%	1.4%	1.4%	0

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	45.0%	33.3%	16.7%	3.3%	1.7%	9



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

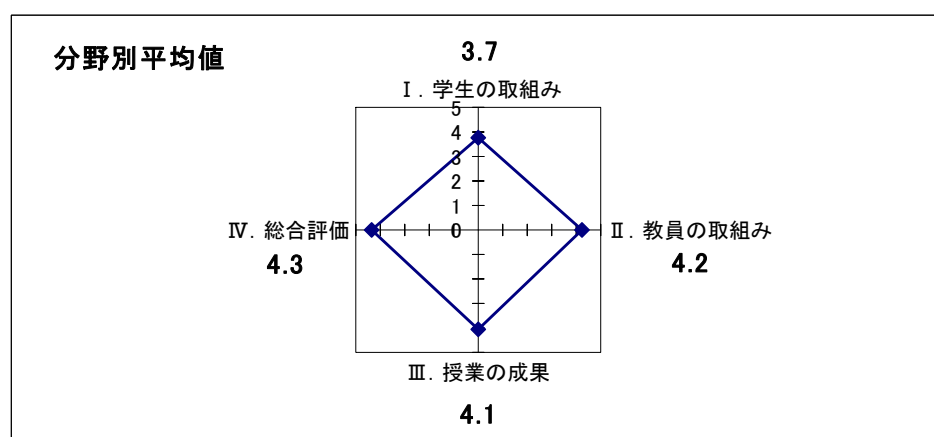
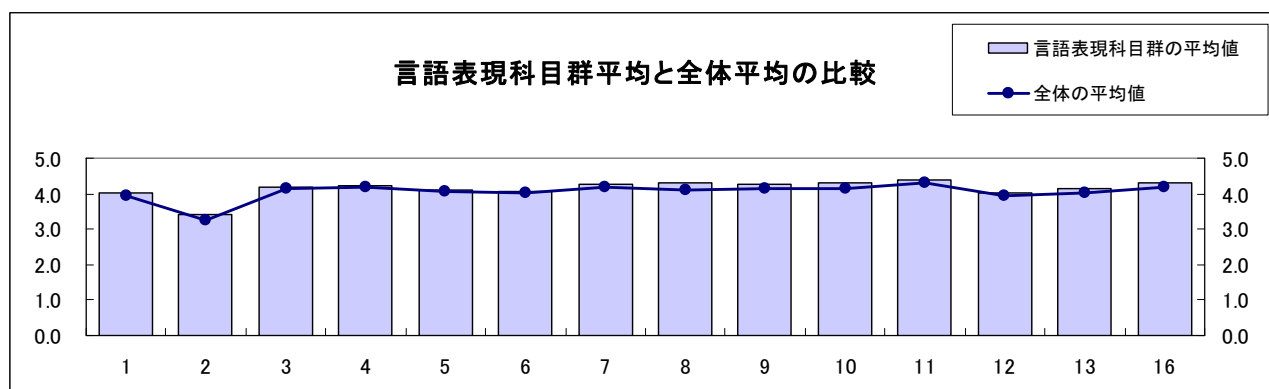
玉川大学

コア科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2387

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.0	30.4%	47.2%	19.3%	2.6%	0.5%	4
	2 授業以外によく予習復習した	3.4	15.7%	30.8%	37.9%	12.3%	3.4%	4
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.2	42.3%	37.0%	17.9%	2.3%	0.5%	6
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	46.6%	33.0%	17.9%	2.2%	0.3%	5
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.1	40.3%	34.6%	22.3%	2.4%	0.5%	6
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.1	39.3%	34.2%	22.5%	3.3%	0.7%	4
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.2	50.2%	29.9%	15.5%	3.5%	0.9%	4
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.3	52.8%	30.3%	14.1%	2.5%	0.4%	3
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.3	48.4%	32.5%	16.9%	2.0%	0.3%	3
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.3	51.6%	30.3%	15.4%	2.2%	0.5%	3
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.4	57.9%	26.8%	13.7%	1.2%	0.4%	5
III	12 授業全体についてよく理解できた	4.0	35.5%	37.2%	22.0%	4.1%	1.2%	10
	13 授業の内容に興味をもてた	4.1	44.4%	31.8%	18.7%	3.6%	1.5%	17

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.3	54.0%	28.2%	14.9%	2.3%	0.5%	312



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

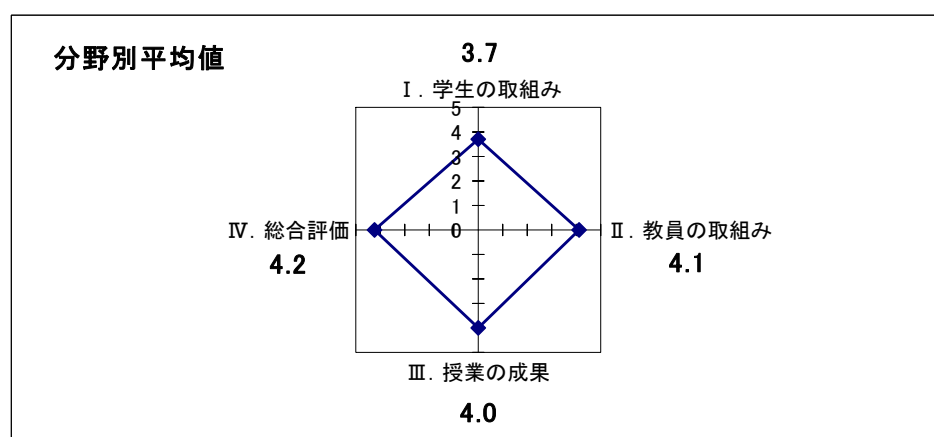
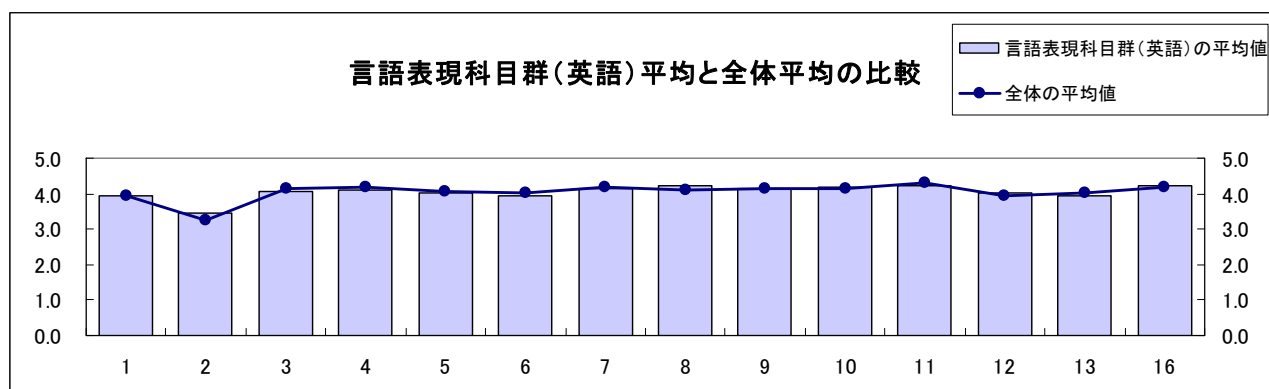
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語

回答数(全体): 840

分野	設問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	27.6%	43.6%	24.2%	3.7%	1.0%	0
	2 授業以外によく予習復習した	3.5	17.4%	29.0%	38.2%	11.9%	3.5%	0
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	36.4%	37.5%	23.0%	2.4%	0.7%	1
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	39.7%	33.5%	23.2%	2.9%	0.7%	1
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	37.4%	34.4%	23.7%	3.8%	0.7%	0
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	33.8%	33.6%	27.6%	3.9%	1.1%	0
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	43.9%	32.7%	18.7%	3.8%	1.0%	1
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.2	47.3%	31.9%	17.4%	2.9%	0.6%	0
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.2	42.7%	33.3%	21.5%	1.8%	0.6%	0
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	44.8%	32.1%	20.0%	2.7%	0.4%	1
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	47.0%	30.1%	20.4%	1.7%	0.8%	0
III	12 授業全体についてよく理解できた	4.0	35.7%	36.0%	24.9%	2.4%	1.0%	5
	13 授業の内容に興味をもてた	4.0	35.4%	32.3%	26.5%	3.8%	2.0%	6

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	48.3%	28.6%	19.5%	2.9%	0.7%	147



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入
◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

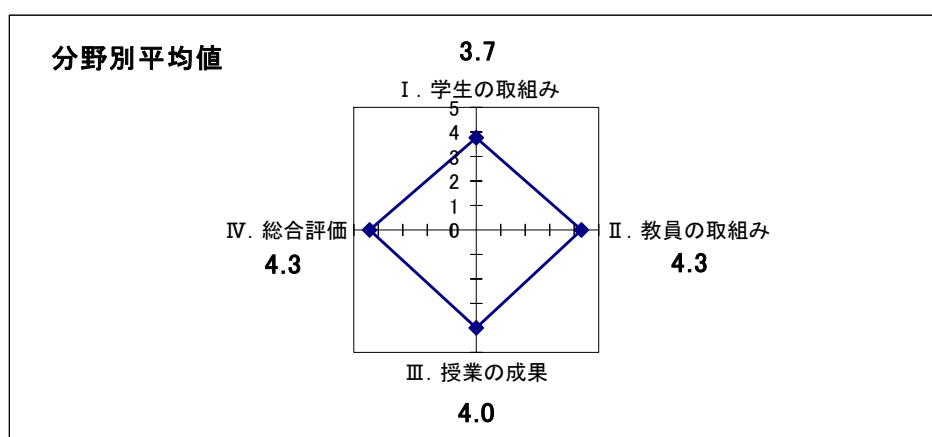
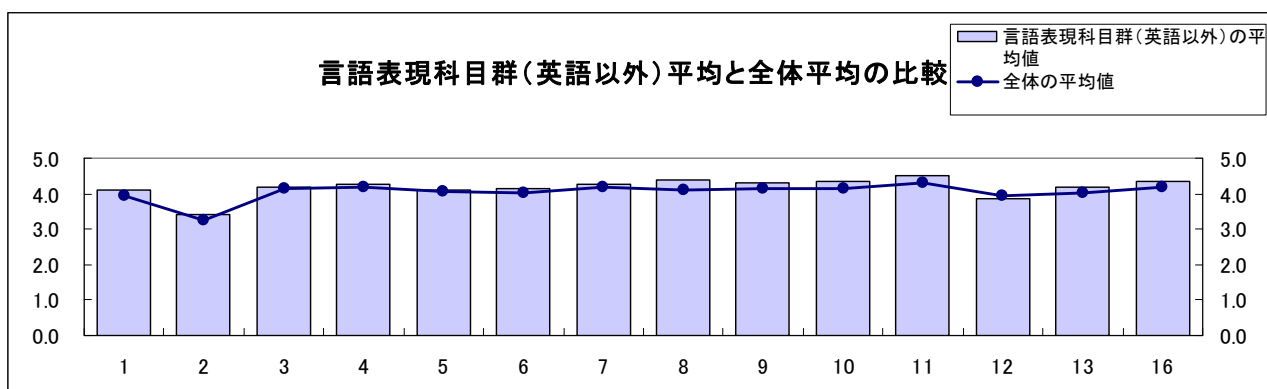
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語以外

回答数(全体): 925

分野	設問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.1	31.7%	48.4%	17.2%	2.4%	0.3%	1
	2 授業以外によく予習復習した	3.4	13.6%	32.7%	37.4%	12.8%	3.5%	1
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.2	42.0%	39.7%	15.4%	2.4%	0.5%	2
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.3	46.9%	35.0%	15.8%	2.1%	0.2%	2
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.1	37.6%	38.9%	21.6%	1.5%	0.4%	4
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.1	40.5%	36.4%	20.2%	2.3%	0.7%	2
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.3	52.2%	28.5%	13.9%	4.2%	1.3%	1
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.4	56.9%	29.4%	11.4%	1.9%	0.4%	0
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.3	50.5%	31.8%	15.6%	1.8%	0.2%	1
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.4	55.1%	29.9%	12.1%	2.4%	0.5%	1
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.5	64.1%	24.5%	10.1%	1.0%	0.3%	3
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	28.0%	39.3%	23.6%	7.2%	2.0%
13 授業の内容に興味をもてた		4.2	46.1%	32.2%	16.9%	3.3%	1.5%	6

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.3	53.7%	29.8%	13.4%	2.6%	0.5%	92



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成21年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

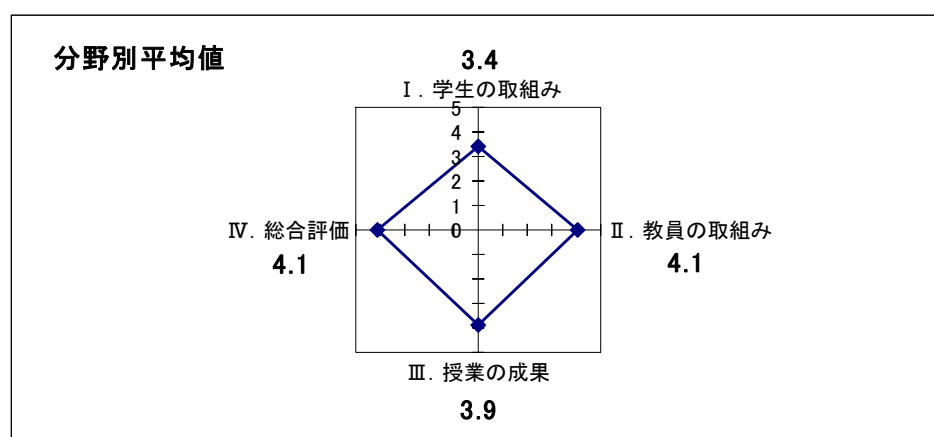
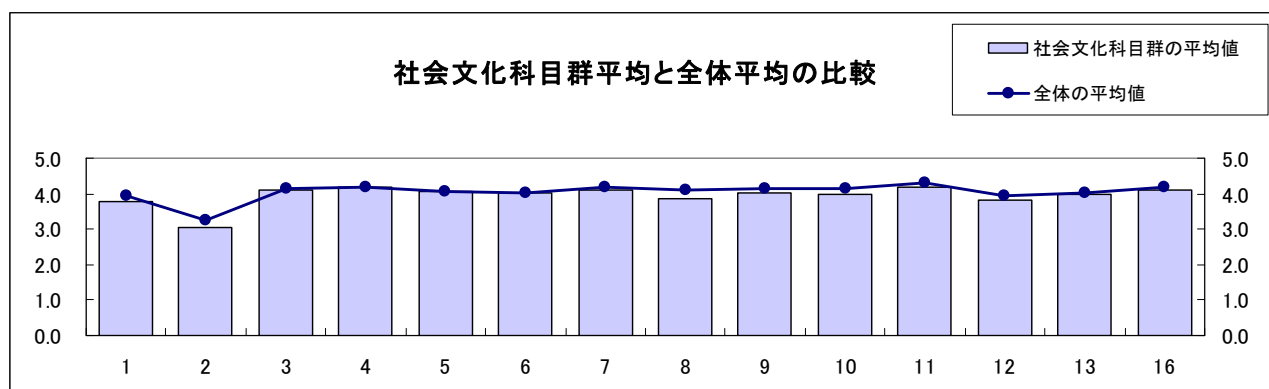
玉川大学

コア科目 社会文化科目群

回答数(全体): 2573


分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	20.4%	45.0%	28.0%	5.5%	1.2%	5
	2 授業以外によく予習復習した	3.0	8.9%	21.2%	41.7%	21.1%	7.2%	4
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	37.6%	39.5%	18.6%	3.4%	0.8%	7
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	42.6%	38.5%	15.9%	2.4%	0.6%	7
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	36.1%	36.6%	23.7%	2.8%	0.8%	15
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	36.8%	34.0%	23.3%	4.8%	1.1%	7
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	43.9%	31.4%	17.6%	5.0%	2.1%	6
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.9	33.9%	29.3%	27.3%	7.3%	2.2%	6
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	36.5%	34.6%	23.4%	3.9%	1.6%	7
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	35.8%	35.1%	23.4%	4.1%	1.4%	9
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	45.6%	33.9%	17.0%	2.8%	0.7%	7
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	26.9%	40.0%	25.0%	5.7%	2.4%
13 授業の内容に興味をもてた		4.0	38.5%	32.2%	20.8%	6.0%	2.6%	26

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	43.6%	32.2%	18.6%	4.0%	1.7%	310



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数



参 考 资 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事要旨

第 1 回大学 FD 委員会議事要旨

- 日 時 : 平成 21 年 5 月 26 日 (火) 17:30~19:20
- 場 所 : 教学事務棟 150・151 会議室
- 出席者 : (委員長) 島川聖一郎
(副委員長) 大藤 正、菊池重雄
(委 員) 平高典子、関川清広、小倉研治、小林幸夫
金井茂夫、小嶋正敏、切田節子
(事務担当) 茂村恭司、大野太郎、柳原達宏、山崎千鶴
- 欠席者 : (委 員) 林 三雄 *敬称略
- 議 題 : (1) 平成 21 年度 活動計画に関する件
(2) 大学新任教員研修会に関する件
(3) 平成 21 年度 FD ワークショップに関する件
- 報 告 : (1) 国立教育政策研究所「FD プログラムの構築支援と FDer (ファカルティ・ディベロッパー) の能力開発に関する研究」について
(2) コア科目 学生による授業評価アンケートについて

議事要旨 :

今年度の大学 FD 委員紹介のあと、島川聖一郎委員長の司会により議事が進行した。

(1) 平成 21 年度 活動計画に関する件

島川委員長より、今年度の本学の FD 活動について説明。つまり、本学は早くから FD 活動に取り組んできたが、全国的、また国際的な流れを見てみると、大学の FD は第 2 期に入ったと見られる。今後は、次代を担う層の教育力向上を目的に新しい課題に取り組んでいきたい。また、今年度の新任教員に対しては、大学の中で孤立することのないよう、学部長をはじめ、それぞれの学部の教員間のコミュニケーションをお願いしたい、と報告された。また、菊池副委員長より、すでに欧米では一律の FD 活動ではなくキャリアステージを区分した FD に変化してきている、また、教員だけではなく職員も含め、FD から PD (Professional Development) または ED (Educational Development) としての取り組みが求められている、と説明があった。

さらに島川委員長より、英国では大学教員になるための研修が大学院で行われており、

日本国内を見ても大学職員養成を目的とした大学院が設立されており、FDを目的とした研修会・ワークショップについても、さまざまな立場からの教授法の確立を考えていきたい、と報告された。

(2) 大学新任教員研修会に関する件

委員長指名により、菊池副委員長から説明。つまり、新たに本学にお迎えする方に早く本学の教員になっていただくことを目的に、本学ではかなり早い段階から研修会を実施している。しかし、その効果または継続性についての検証は行なわれておらず、その必要性が感じられる。そこで、今年度の研修会については今後の継続性を検討する視点からみる必要があるとあり、ついては、次回委員会までに、他大学の取り組み事例を調査して新しいプログラム案を提示するので、検討をお願いしたい、とのこと。

それを受け、島川委員長より、他大学から移ってこられる教員と企業から教員になる場合では必要な研修が異なるのではないかと。バックグラウンドが異なるのであれば、研修においても異なるコンテンツがあってもよいのではないかと、との意見があった。また、大藤副委員長より、個の価値を高めるための個人の活動が必要なことは当然のことであるが、それをいかに組織として取り組み、組織としてどう動くかを考えるべきではないかと、との意見があり、島川委員長も、組織が必要とする役割、能力を考えていく必要がある、と述べた。

(3) 平成21年度 FDワークショップに関する件

委員長指名により、菊池副委員長から資料に基づき説明。つまり、これまでコア・FYE教育センターではコア科目担当者を対象とした研修会を開催してきたが、今年度より、大学開講科目担当者全員を対象として開催する。ついては、資料のように6つのテーマのワークショップを開催する。ご承認いただければ、今後、講師の選定・日程の調整に入りたい、とのこと。ただし、「知的誠実性の指導」については時期尚早との見方もあり、今後、その有効性等を調査し開催時期を計りたい。また、講師については、委員の中から担当者を探したいが、適任者がいなければ学外からお招きすることを前提としたいとも述べた。それに対し、大藤副委員長より、長期的に考えれば本学の全ての教員がいずれかのワークショップを担当できるようにならなければいけない、と述べた。また、島川委員長も、資料にあるテーマは高等教育の教員として他者に説明できることは重要であると述べた。

議案については反対の意見もなく、資料のとおり計画することとなり、今後、講師の選定・日程の調整ができたところで全教員に案内していくこととする。

報告要旨：

(1) 国立教育政策研究所「FDプログラムの構築支援と FDer（ファカルティ・ディベロッパー）の能力開発に関する研究」について

委員長指名により、山崎事務担当から説明。つまり、国立教育政策研究所では FDer 研究会が「FDプログラムの構築支援と FDer（ファカルティ・ディベロッパー）の能力開発に関する研究」を進めてきたが、この度、「大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン」を発行した（冊子は会議資料として配付）。FDマップなど、今後の取り組みについての資料ともなるものなので、ご一読いただきたい。

なお、6月23日には当該研究成果の中間報告会「国立教育政策研究所FD公開セミナーFD実質化のための提案～「FDマップ」、「基準枠組」の活用による教育改善～」が開催される。出席を希望される場合には、学士課程教育センターにご連絡のこと。

(2) コア科目 学生による授業評価アンケートについて

委員長指名により、山崎事務担当から説明。つまり、コア科目の学生による授業評価アンケートについては、今年度も継続して実施する。ついては、6月に実施する旨の案内をコア科目担当者全員にお送りする。また、7月に実施科目担当者宛にアンケート用紙等をお送りするので、必ず実施していただけるよう、学部でもご連絡いただきたい、とのこと。

以 上

第2回大学FD委員会議事要旨

- 日時 : 平成22年1月15日(金) 18:30~19:20
場所 : 大学研究室棟 B107 会議室
出席者 : (副委員長) 大藤 正、菊池重雄
(委員) 平高典子、小倉研治、小林幸夫、林 三雄
小嶋正敏、切田節子
(事務担当) 大野太郎、柳原達宏、山崎千鶴
欠席者 : (委員長) 島川聖一郎
(委員) 関川清広、金井茂夫
(事務担当) 茂村恭司 *敬称略

- 議題 : (1) 平成22年度 新任教員研修会に関する件
(2) 平成21年度 FD ワークショップに関する件

- 報告 : (1) 大学コンソーシアム京都主催 第15回FDフォーラムについて
(2) 全国大学体育連合発 学士課程教育に関する共同声明について
(3) コア科目 学生による授業評価アンケートについて
(4) 「平成21年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の作成について

議事要旨 :

大藤 正副委員長の司会により議事が進行した。

(1) 平成22年度 新任教員研修会に関する件

司会指名により、山崎事務担当から資料に基づき説明。つまり、来年度より本学にお迎えする先生を対象とした研修会を、3月3日・4日の両日にわたり開催したい。内容については、国立教育政策研究所の研究会プロジェクトにより開発された「新任教員FDのための基準枠組」の発表を受け、昨年度のプログラムから若干の変更をしている。研修目的はこれまでと同様であるが、新たに到達目標を設定した。また、研修開始にあたって、理事長より開催の主旨等の説明をしていただくこととした。一堂了承。

ただし、菊池副委員長より以下補足。つまり、本学の新任教員研修は比較的早い時期から取り組んでいるが、現状では立命館大学に代表されるように他にも多くの大学が開催しており、本学の特徴として、これまで以上に研修の目的、到達目標を明確に考えていきたい。懇親会は同僚性FD活動の推進を目的に第3回の大学FD委員会として実施するので、是非、委員には出席してほしい、と述べた。

(2) 平成 21 年度 FD ワークショップに関する件

司会指名により、山崎事務担当から、第 1 回委員会の際に前期分のワークショップについてご承認をいただいたが、後期分として資料 3 件のワークショップを開催したい旨、説明。一堂了承。

ただし、菊池副委員長より、今後は大学 FD 委員にもワークショップの司会や講師をお願いすることも考えたい、との説明。

報告要旨：

(1) 大学コンソーシアム京都主催 第 15 回 FD フォーラムについて

司会指名により、山崎事務担当から資料に基づき説明。つまり、当該フォーラムについては例年、本学から多くの教職員が参加している。すでに非加盟大学の参加申込が開始しており、今年度も各学部で参加を検討してほしい。なお、本フォーラムについては、参加に伴う経費は各学部で負担のこと。

(2) 全国大学体育連合発 学士課程教育に関する共同声明について

司会指名により、山崎事務担当より資料に基づき説明。つまり、当該連合より共同声明の文書が送られた。主に実技による授業が展開される体育においても学士課程教育について資料のような取り組みがなされている。本学では当該団体には加盟しないこととなったが、参考として資料一読のこと。

(3) コア科目 学生による授業評価アンケートについて

司会指名により、山崎事務担当から説明。つまり、昨年 11 月にご案内のように、今学期末にもアンケートを実施する。については、各学部においてもご協力をいただけるよう、ご案内のこと。

(4) 「平成 21 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の作成について

司会指名により、山崎事務担当から説明。つまり、例年のとおりに平成 21 年度の報告書を作成する予定であり、後日原稿執筆のお願いをする、とのこと。

以 上

第3回大学FD委員会議事要旨

日 時 : 平成22年3月4日(木) 15:30~16:30

場 所 : 大学9号館400教室

出席者 : (副委員長) 大藤 正、菊池重雄
(委 員) 平高典子、小倉研治、小林幸夫、林 三雄
(事務担当) 大野太郎、柳原達宏、山崎千鶴

欠席者 : (委員長) 島川聖一郎
(委 員) 関川清広、金井茂夫、小嶋正敏、切田節子
(事務担当) 茂村恭司

*敬称略

報 告 : (1) 次年度新任教員との情報交換について
(平成22年度 新任教員研修会との合同開催)

報告要旨 :

(1) 次年度新任教員との情報交換について

平成22年度 新任教員研修会において、大学FD委員との情報交換を図ることを目的に、大学FD委員が合流。それぞれの学部にお招きする教員を中心に、本学について、また教育研究活動について、意見を交換する。

なお、本取り組みはFD活動における同僚性取り組みの実践としての取り組みであり、今年度の大学FD委員会活動の一環と位置づけるものである。

以 上

参考資料 2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙

各項目ごとにA～Eでランクをつけてください。

その際、Aは「全くそのとおり」、Eは「全くそのとおりでない」という評価です。

1. 全体についての感想をお聞かせください	A	B	C	D	E	フリーコメント
・総合的に満足されていますか						
・担当する授業に役立つと思いますか						
・ご自身のプレゼンテーション・スキルは向上したと思いますか						

2. 研修会の内容についてお聞かせください

・研修内容は適切でしたか (2日間という時間制約を考慮に入れてお答えください)						
・講師の説明は理解しやすかったですか						
・テキスト、教材、教具などは適切でしたか						

3. 研修会の運営についてお聞かせください

・2日間という日程は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・時間配分は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・開催場所、施設などは適切でしたか						
・事務手続き、連絡などは適切でしたか						

4. 今後のFD研修会についてお聞かせください

・この研修の開催を継続することに賛成ですか						
・この研修の受講を、他の人にも勧めますか						
・どんな内容の研修会を希望しますか (複数記入可)						

5. 具体的な技法について、裏面にお書きください。

6. その他の感想、コメントなどありましたら、別紙に自由にお書きください。

今後のFD研修会開催および運営の参考資料とさせていただきます。

参考資料3. 「コア科目授業評価アンケート」用紙

玉川大学 ー授業改善のためのー 【コア科目】
平成21年度 学生による授業評価アンケート

このアンケート調査は授業担当教員が学生諸君と共に、授業をより改善することを目指して実施するものです。記入に当たっては、授業の全体を視野に入れた、責任ある評価をお願いします。なお、このアンケートがあなたの成績に影響することは一切ありませんので、氏名などは記入しないでください。

記入日 年 月 日	曜日 時限	学年 ①1年 ②2年 ③3年 ④4年 ⑤その他
--------------	-------	-------------------------

授業科目名 一年次セミナー102
担当教員名

(強く思う 非常に良い)	(やや思う 良い)	(どちらとも言えない 普通)	(あまり思う 良くない)	(全く思う ない)
-----------------	--------------	-------------------	-----------------	--------------

以下の質問について、該当する番号にひとつだけ○をつけてください。

あなたの取り組み	5	4	3	2	1
1 授業には意欲的に取り組んだ	5	4	3	2	1
2 授業以外によく予習復習した	5	4	3	2	1
教員の取り組み					
3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	5	4	3	2	1
4 毎回よく授業の準備がされていた	5	4	3	2	1
5 シラバスにそって授業が行われた	5	4	3	2	1
6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	5	4	3	2	1
7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	5	4	3	2	1
8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	5	4	3	2	1
9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	5	4	3	2	1
10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	5	4	3	2	1
11 教員は毎回熱意をもって授業をした	5	4	3	2	1
授業の成果					
12 授業全体についてよく理解できた	5	4	3	2	1
13 授業の内容に興味をもてた	5	4	3	2	1
担当教員が科目毎に設定する設問					
14 この授業を学ぶことで、学生生活をより意義あるものにすることができると思う	5	4	3	2	1
15 自分が社会人になることの責任を自覚することができた	5	4	3	2	1
総合評価					
16 この授業を受講してよかったと思う	5	4	3	2	1

その他、意見、要望、感想など自由に記述してください。(裏面使用可)

参考資料 4. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第 1 条 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第 2 条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 4 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 5 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 6 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第 3 条 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第 4 条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第 5 条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

第 6 条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第 7 条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、学士課程教育センターとする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

平成 22 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8866 (学士課程教育センター)